

金春禪竹伝書における 特殊モーラ・拗音への節付について

浅田 健太郎

はじめに

筆者は浅田 2023（以下前稿とする）において、金春禪竹（氏信、応永十二年（1405）—文明二年（1470）頃）自筆の伝書類（『五音次第他』『五音三曲集』）を資料として、母音連続に対する節付について報告を行った。前稿では、禪竹伝書において母音連続にゴマ点が施される場合、前部要素と後部要素それぞれにゴマ点が付される独立型と前部要素と後部要素に合わせて1つのゴマ点が付される一体型の二種の様式があることを示し、さらにその二種の様式の比率は後部要素の種類によって異なり、独立型は一オ、一エ、一イに多く、一ウに少ないことを確認した。

前稿では母音連続および二重母音に焦点を当てたため、促音、撥音など他の特殊モーラについては部分的にしか触れられなかった。本稿では、特殊モーラ全般と拗音に対象を広げ、禪竹伝書における特殊モーラへの節付の全体像を示すことを目的とする。それによって前稿の主張を補強するとともに、促音や撥音の音価や、特殊モーラ間の独立性の高さの関係について報告したい。

1. 金春禪竹伝書『五音之次第他』『五音三曲集』の節付

本稿では、前稿に引き続き金春禪竹自筆の伝書である『五音之次第他』と『五音三曲集』を対象とする⁽¹⁾。

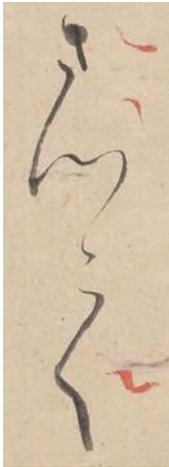
金春禪竹の自筆伝書である『五音之次第他』（享徳四年（1455））と『五音三曲集』（長祿四年（1460））は、伝書のなかに謡の詞章が含まれ、さらに朱筆によるゴマ点が比較的詳密に施されている。両本ともゴマ点は禪竹によるものと推定されている（樹下 1997：387-389、坂本 2015・2020）。本稿ではこれらを

¹ なお本文は、『金春禪竹自筆能楽伝書』（国文学研究資料館影印叢書第二巻、汲古書院、1997）、「金春禪竹伝書」（<http://codh.rois.ac.jp/pmjt/book/200006858/>、日本古典籍データベース（国文研等所蔵）、2022年1月30日閲覧）によった。画像の転載は後者による。

踏襲し、節付の主体を金春禅竹と考え、室町時代中期 15 世紀中頃の資料として位置づける。

前稿では、謡の節付とモーラとの対応関係に注目し、重音節への節付を独立型節付と一体型節付に区分した。

独立型節付は、重音節の後部要素（促音・撥音・二重母音の第二要素）に対して、前部要素に対するゴマ点とは別に、独立してゴマ点が配されているものである（以下、問題とする後部要素に対して下線を施す。なお、用例の掲出にあたっては、『五音之次第他』を「次第」、『五音三曲集』を「三曲」と略称する。）。



さつて(去)の〔次第 5 オ〕



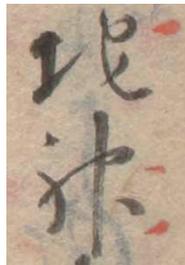
さかなれども〔次第 4 ウ〕



ふけう(不孝)の〔三曲 24 ウ〕



八百(はつびやく)〔三曲 5 ウ〕



地神(おじん)〔三曲 5 ウ〕



思(おもひ)も〔三曲 18 オ〕

一体型節付は次の諸例のように、重音節の前部要素と後部要素をひとまとめとして、一つのゴマ点が配されているものである。



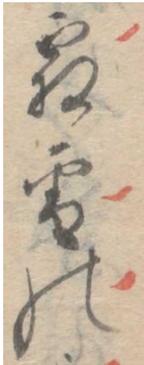
きたつて(来)[三曲 20 オ]



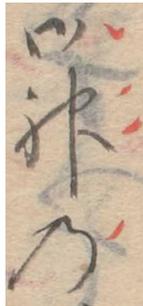
にはふらん [三曲 6 ウ]



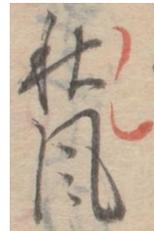
うれい(憂)[三曲 24 オ]



霜雪(さうぜつ)の [三曲 12 オ]



御(おん)神の [三曲 5 オ]



秋風(しうふう)[三曲 17 オ]

以上のように節付の様式を二分したうえで、前稿では母音連続²⁾に焦点を絞り次のことを主張した。

²⁾ 前稿においては、「母音連続」という語を二重母音と母音連接を合わせた概念を指す語として用いた。本稿でもそれを踏襲する。

まず、形態素内の母音連続の種類について、節付に反映する独立性からみると、形態素内の母音連続のうち一エ、一オ、一イ（㊦イを除く）は非特殊モーラと同程度に高い独立性を有すること、形態素境界をまたぐものとの差が認められないことから、音節境界をまたぐ母音連続であると解釈できるとした。一方で、一ウと㊦イの後部要素については独立性が低く、その点で撥音や促音に類似しており、重音節 /CVW/、/CVJ/ を構成する二重母音であると考えた。また一ウについては、独立性の低い㊦ウ、㊧ウ、㊨ウのグループと独立性が中程度の㊩ウの間に独立性の差が認められる。現代歌謡の楽譜における音符付与の研究によれば、二重母音より長音に一体型の音符付与が多いとされ、これを禪竹伝書の節付に適用すると、母音連続が実現するときの融合化、長音化の度合は、㊦ウ、㊧ウ、㊨ウの方が、㊩ウよりも進んでいると推定した。

本稿では調査対象を禪竹伝書における特殊モーラ（二重母音の後部要素、撥音、促音・入声音）全体に広げ、また同時に金春 2004、松居 2011・2012 で言及された拗音への節付にも注目する³⁾。そのうえで、特殊モーラの種類によって一体型と独立型の割合に違いがあるのかどうか、そして現代語の諸研究で認められるような特殊モーラの階層性・序列が中世語にも認められるかどうかを明らかにすることを目的とする。

2. 詞章の表記の様式

実際に節付をみる前に、まずゴマ点が付される本文詞章の表記の分類について説明しておく。謡の譜は先行して詞章が書かれ、さらにその傍らにゴマ点をあとから記入するので、後に示すように、ゴマ点の付され方には詞章の表記様式が大きく作用する。そこで、特殊モーラと表記との関係を「分離表記」と「融

³⁾ なお禪竹伝書に先立つ世阿弥自筆の能本資料は対象としない。浅田 2023 でも述べたように、金春禪竹伝本の節付は、ある程度の施譜量を有し、詞章全体に対する施譜の密度も高く、基本的にはゴマ点が付されるのが通常の状態であると認められる。このような状況のもとでは、ゴマ点が付されないことが何らかの意味を持っていると推定できる。一方、世阿弥の自筆能本では、資料によってはゴマ点が付されるものの部分的であり、むしろゴマ点が付されないことの方が通常である。施譜されないのが普通であるから、ゴマ点があることの意味を考察することが重要であり、禪竹伝書で採った「ないことの意味」を考える方向からの検討は困難である。ちなみに三宅 1997 は世阿弥能本の施譜について、「先行の謡い物などをそっくり借用した場合には、ゴマ点も含め節付けはまったく付されていない。それに対しゴマ点が詳細に施されるのは自筆本執筆に際しての書き下ろし又は改訂部分に集中している可能性が高い」(5) という見解を示している。

合表記」の2種に分けて考える。すなわち、特殊モーラや拗音に対して、直前のモーラと異なる文字があてられている例（たとえば「おとろふ（衰）」「給（たま）ふ」など）を分離表記とし、同じ文字が割り当てられている場合（たとえば「僧（そう）の」「申（まうす）は」など）を融合表記とする。

なお、1音節に対応しているくの字点（「よる/ゝ（宵々）に」「べん/ゝ（便々）と）」については、「/ゝ（よひ）」「/ゝ（べん）」を分離表記として扱った。ただし、くの字点が2音節以上の音列に対応している場合（「くりかへし/ゝ（くりかへし）ても」）は融合表記とした。禅竹伝書における分離表記と融合表記の例を次表にまとめておく。

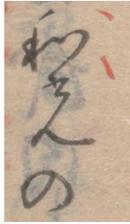
表1 本文詞章の表記様式（分離表記と融合表記）

	語例
分離表記	おとろ <u>ふ</u> （衰）、ぐ <u>わ</u> んりき（願力）、さか <u>ん</u> なれども、さ <u>つ</u> て（去） 給（たま） <u>ふ</u> 、思 <u>ひ</u> いづれば、めん/ <u>ゝ</u> （面々）に
融合表記	天（て <u>ん</u> ）も、申（ま <u>う</u> す）も、月神（ぐ <u>わ</u> ちじん）、一（い <u>つ</u> ）しやう（生）は くりかへし/ <u>ゝ</u> （くりか <u>へ</u> し）ても

ここに示した表記上の分類は、二重母音の後部要素、撥音、促音とその直前のモーラが、詞章上で分割されて表記されているかという観点から行ったものである。謡本の作成は、詞章を先に書いてからゴマ点を付けていくという順序で行われるため、節付の素材としての詞章において、特殊モーラ類が先行モーラと分離して書かれているか、先行モーラと特殊モーラが同じ文字に対応する形で融合的に書かれているかは、節付のしかたに影響を与えることが予想される。したがってこの2種を分けて整理し、表記ごとに一体型と独立型の比率を見ていくことにする。

3. 節付の様式が判断しにくい例について

第1節で述べたように、本稿の調査では、特殊モーラを含む音節、すなわち重音節にあたる部分と拗音部分について、一つでもゴマ点が付されている例を対象とし、一体型か独立型かを判断する。ただし一体型と独立型の判別にあたっては、ゴマ点の位置や数により、判断の難しい例も存する。一つは特殊モーラにあたる部分にゴマ点がなく、一見一体型のように見える、次のような例である。



和光(わくわう)の〔三曲7オ〕



物くるひ(狂)と〔次第7ウ〕

「和光(わくわう)の」での「光」への節付について、音韻上の合拗音および二重母音㊦ウを含む音節に対応するゴマ点は、まとめて一つである。また「物くるひと」のルイについても、同様である。これらは、重音節部分だけで見ると一体型のように見えるが、同じ文節のその他の部分(「和光(わくわう)の」「物くるひと」)にも譜がない。これら「の」「ものく」にゴマ点が付されていないのは、音楽的な理由(たとえば抑揚のない音程であるなど)あるいは記譜法上の理由(たとえば前と同じ音程であり特に音階を明示する必要がないなど)に求めるほかない。一方で、「くわう」「るひ」は拗音や後部母音の独立性が低いために一体型で付されたとも考えられるが、「の」「ものく」と同じように音楽的な理由、記譜法上の理由によるものかもしれない。このように譜が付けられていない部分が同語に複数ある場合は、譜がないことの意味付けがあいまいになるのであり、「くわう」「るひ」について譜が与えられていないのは、独立性が低いゆえであるという蓋然性が低くなる。このような理由で、同一文節において特殊モーラ以外の部分に譜が付されない部分がある場合は、別に「無譜 or 一体型」として区別することにした。

また、融合表記の場合、1字が複数のモーラに対応することになり、2モーラに対して1つのゴマ点が当てられている場合は一体型と判断されるが、次の例のように、まれにモーラ数とゴマ点の数が合わない場合がある。



: 申 (まうす)〔三曲 7 ヲ〕(1 字 3 モーラに 1 つのゴマ点に対応)



: 間 (あひだ)に〔次第 4 オ〕(1 字 3 モーラに 2 つのゴマ点に対応)



: 候 (さふらふ) やな〔三曲 11 オ〕(1 字 4 モーラに 1 つのゴマ点に対応)

これらはどのモーラがどのゴマ点に対応しているのかが分からないため、例から除外する。ただし、重音節部分に長い譜が用いられており、2 モーラ分を 1 つのゴマ点で施譜したと解される場合(下図「申(まうす)も」)は、二重母音マウの一体型の例と判断した。



: 申 (まうす)も〔三曲 5 オ〕(1 字 3 モーラに 2 つのゴマ点に対応)

なお、禅竹伝書において非特殊モーラと特殊モーラの全体をみた場合、一体型は独立型に比べて全体的に少数であり、一体型で節付が為される場合は、何らかの理由があると考えられる。本稿ではその要因を言語的な要因、すなわち特殊モーラの種類が一体型の出現率に影響を与えていると仮定し、以下でその検証を行いたい。

4. 特殊モーラ・拗音への節付の全体像

本節では、二重母音、撥音付き重音節、促音・入声音付き重音節、拗音への節付について全体像を示し、特殊モーラによる独立性の序列の有無を確かめる。

先に2節で述べたように、表記の様式（分離表記（仮名表記）か融合表記（漢字表記・仮名表記）か）が節付の様式（独立型か一体型か）に大きな影響を及ぼすため、表記ごとに分析を行う。

また取り上げる特殊モーラについては、音節末に位置する二重母音の後部要素、撥音、促音・入声音とし、これに拗音を加える。

まず、本稿における二重母音の範囲について説明する。前稿では、すべての母音連続について節付に反映する独立性を観察した結果、次の諸点を明らかにした。

- 形態素境界をまたがない母音連続のうち、一エと一オ、㊦イ・㊧イ・㊨イ・㊩イの後部要素は非特殊モーラと同程度に高い独立性を有し、かつ形態素境界をまたぐものとの差が認められないことから、音節境界をまたぐ母音接続であると解釈できる。
- 形態素境界をまたがない母音連続のうち、㊦ウ・㊧ウ・㊨ウ・㊩ウと㊪イの後部要素は独立性が低く、かつ形態素境界をまたぐものとの差が認められることから、音節境界をまたがない二重母音であると解釈できる（ただし㊨ウは独立性が高く、割って謡う意識的な謡曲の伝承音として解した）。

本稿ではこの結果に従い、一ウ、㊪イを二重母音として選定する。また一エ、一オ、㊦イ、㊨イ、㊩イ、㊪イを母音接続とし、比較の対象とする。なお一アについては、形態素境界をまたがない例は存しない。

次に撥音について、和語では撥音便によって生じる撥音、「おん（御）」の後部要素、助動詞類「一む」「らむ」「けむ」のムの部分をも撥音として扱った。また漢語では、-m, -nに由来する鼻音韻尾「一ん」「一む」を対象とする。

また促音・入声音は、和語の促音便によって生じた促音一ツ、漢語の舌内入声一ツ・一チ、喉内入声一ク・一キ、入声音が促音化を被った一ツを扱う。特に入声音については開音節化が問題となり、たとえば喉内入声音は、後ろにカ

行音が接する場合に促音化を起こすことが予想されるが、このような入声音の後接環境による実現形の変異について、まずは後接環境を問わず全例を収集してから、5節で環境による違いを見るという手順をとる。ただしーウと合流している唇内入声は二重母音（ーウ）として扱う。

最後に拗音については、特殊モーラとして扱われることが少ない一方で、独立した音素として認められる場合も多い。金春 2004 および松居 2011・2012 では、拗音への節付に注目して、独立した譜を与える謡本と、与えない謡本があることが指摘されている。本稿でも先行研究にならい、開拗音を /CjV/、合拗音を /CwV/ と解釈したうえで、「ーヤ」「ーユ」「ーヨ」「ーワ」に対して独立してゴマ点が配されているかどうかを確かめる。たとえば「しや」（分離表記）に対して「し」「や」それぞれにゴマ点が付されるか「しや」全体に1つのゴマ点が付されるか、あるいは「者」（融合表記）に対してゴマ点が2つ付されるか1つ付されるかという点を見ることになる。

また拗音への節付については、「しや」「者」「くわ」「火」などの拗音が単独で現れる場合と、「しやう」「正」「ぐわん」「願」「ぎよく」「玉」などの拗音と他の特殊モーラが組み合わされて現れる場合がある。ここで後者の「しやう」「正」「ぐわん」「願」「ぎよく」「玉」について、たとえば「玉」に対して2つのゴマ点が付されている場合、〈ぎよ〉〈く〉というふうに節付されたという可能性と、〈ぎ〉〈よく〉というふうに節付された可能性、また〈ぎ〉〈よ〉に節付されて〈く〉は省略された可能性など、さまざまな可能性が想定されるころではある。しかしながら、拗音要素と韻尾要素を一つのまとまりとして〈よく〉に一つのゴマ点が節付されたとみられる確実な例がなく、また拗音表記の「や」「ゆ」「よ」に独立したゴマ点が付された例もないこと、「しや」「しよ」のような他の特殊モーラと組み合わせられず拗音のみで構成される音節の場合にすべて一体型であるのに対して、「かう」「さん」「せつ」のような特殊モーラには独立型も見られることから、〈ギヨ〉〈ク〉と分節された結果である蓋然性をもっとも高いと判断する。このように、拗音音節に特殊モーラが付いた「ぎやう」「ぎよく」「しやう」「しゆつ」「くわう」等への施譜については、ゴマ点が1つの場合は拗音・特殊モーラともに一体型、ゴマ点が2つの場合は拗音一体型、特殊モーラ独立型として判断した（仮にゴマ点が3つの場合は拗音・特殊モーラともに独立型として判断することになるが、禅竹伝書ではそのような例は出現しない）。

以下、分離表記、融合表記の順に全体像を概観する。

4.1 分離表記

特殊モーラ・拗音に対して、前のモーラと異なる文字が与えられている場合（特殊モーラが仮名で書かれている場合）、分離表記とする。比較の対象として、形態素境界をまたがない母音連接（一エ、一オ、㊦イ、㊧イ、㊨イ、㊩イ）の例とともにグラフとして掲げる。

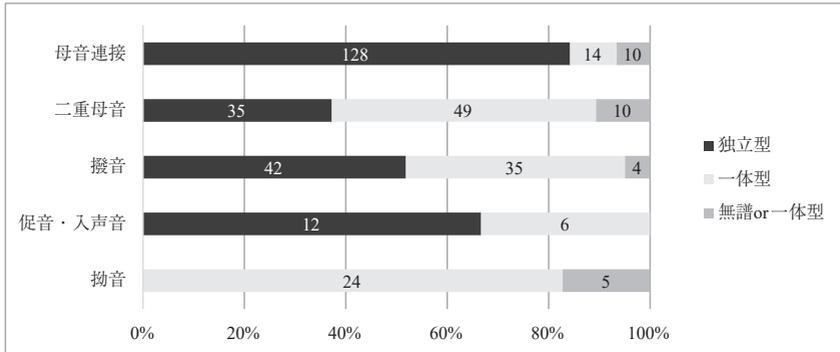


図1 禅竹伝書における分離表記への節付

分離表記に対する節付を見ると、母音連接（一エ、一オ、㊦イ、㊧イ、㊨イ、㊩イ）では9割程度が独立型で占められるのに対して、二重母音（㊦ウ・㊧ウ・㊨ウ・㊩ウ・㊪ウ・㊫ウ・㊬イ）、撥音、促音・入声音、拗音はそれぞれ差があるものの、一体型の例が比較的多いことが指摘できる。ここから、特殊モーラ・拗音には独立したゴマ点が付されにくいことが確認される。

さて、音節末の特殊モーラ三種についていえば、一体型が占める割合が高い順に、二重母音、撥音、促音・入声音となる。ただし、促音・入声音のなかには、開音節化し、独立した音節となっているものも含まれるので注意が必要であり、5節で詳しく考察する。

4.2 融合表記

特殊モーラ・拗音に対して、前のモーラと同じ文字が割り当てられている場合（特殊モーラを含む音節が漢字で書かれている場合）、融合表記とする。分離表記と同様に、ゴマ点の付され方を集計し、次図に掲げる。

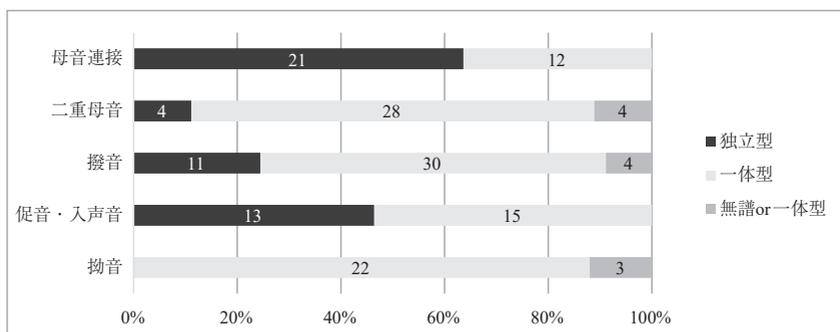


図2 禅竹伝書における融合表記への節付

融合表記は分離表記に比べ、全体的に一体型の占める割合が大きくなる（分離表記で独立型のなかった拗音を除く）。これは与えられた詞章に対してゴマ点を付す際に、たとえば分離表記の「えん」の方が、融合表記の「縁」よりも、撥音/N/に1つのゴマ点を割り当てられやすいということである。詞章の表記に対してゴマ点を配する記譜法を取っている以上、節付の様式がその前提条件として存在する詞章の表記様式に影響を受けるのは自然なと考えられる。

また音節末の特殊モーラ三種の序列について言えば、分離表記と同様に、一体型の多い順に二重母音、撥音、促音・入声音となる。ここでも促音・入声音には開音節化したものが混じていることに気をつける必要があるが、その他の特殊モーラでも、推定される音価としてさまざまな種類のもものが混在しており、より詳細に検討する必要があるだろう。この点を確認するために、次節では特殊モーラごとに、その中身を例とともに見ていく。

5. それぞれの特殊モーラの内部にみられる差異

本節では、二重母音、撥音、促音・入声音、拗音のそれぞれの内部で、独立型と一体型の比に差が無いかどうかを、具体例を示しながら確かめていく。

5.1 二重母音

二重母音については前稿で詳しく論じ、二重母音のなかでも㊦ウと㊧ウを比べると、㊦ウの方が一体型が多いという点など、二重母音の内部にも差があることを示した。ここでは次項以降で検討する撥音、促音・入声音、拗音と比較するため、前稿の報告の内容を整理し直し、簡略化して掲げる。

禅竹伝書における二重母音（㊦ウ・㊧ウ・㊨ウ・㊩ウ・㊪ウ・㊫イ）の例を表記の様式ごとに挙げ、種類ごとに分析する。禅竹伝書では和語・漢語とも仮名で表記されることが多い。まず仮名で特殊モーラが表記される分離表記の例について、独立型、一体型、無譜 or 一体型の順で例を掲げる。なお、一部について影印を掲げたのち、全例を挙げる。

〈分離表記〉

○独立型



あふ(会)〔次第2オ〕



おとろふ(衰)〔次第4ウ〕



おもふ(思)と〔次第3ウ〕



かげろふ(の)〔三曲4ウ〕



りさんきう(驪山宮)の〔三曲16ウ〕

- ㊦イ：あひだ(間)に〔三曲19ウ〕、あひ(会)〔三曲6ウ〕、あひに〔次第2オ〕、ちかひ(誓)も〔三曲6オ〕、ちかひの〔三曲6オ〕、ちかひかな〔三曲4ウ・4ウ〕、御ちかひ〔三曲4オ〕、かひ(甲斐)あるべきは〔三曲21ウ〕、かひなき〔三曲21ウ〕、くれなる(紅)の〔次第3オ〕、ならひ(習)〔三曲21ウ〕、かいがん(海岸)を〔三曲5オ〕、きんかみ(禁戒)を〔次第7オ〕、さんがひ(三界)は〔次第4オ〕、にんがひ(人界)を〔次第6オ〕
- ㊦イ：いひ(言)ながら〔三曲24ウ〕
- ㊦イ：むくひ(報)ならば〔三曲17ウ〕、びすひ(翡翠)の〔次第4ウ〕、すいちやうこうけい(翠帳紅閨)に〔三曲16オ〕
- ㊦イ：えいく(栄花)は〔次第4ウ〕、御せいぐわん(誓願)〔三曲11ウ〕、むれい(憂)の〔三曲21ウ〕
- ㊦イ：うるほひ(潤)に〔三曲12オ〕、よそほひ(装)〔三曲21オ〕、よそほひ〔三曲12オ〕、よそおひ〔三曲11ウ〕、こひ(恋)草の〔三曲18オ〕、こひの〔三曲19オ〕、そひ〔三曲22オ〕、とひ(問)〔三曲23オ〕、いとひけん(厭)〔三曲24オ〕思(おも)ひいづれば〔三曲18オ〕、おもひ(思)草〔三曲18ウ〕、おもひ〔次第4オ〕、おもひも〔三曲24オ〕、よゑ／＼(宵々)に〔三曲18ウ〕、まよひ(迷)をも〔三曲8オ〕、まよひを〔三曲4オ〕、かよひゆく〔三曲13ウ〕、かよひぢの〔三曲9オ〕うつろひて(移)〔次第2ウ・三曲21オ〕
- ㊦ウ：あふ(会)〔三曲6ウ〕、あふ〔次第2オ〕、あんけつだう(闇穴道)の〔三曲24ウ〕、やどりたまふ〔三曲3ウ〕、そうきやう(崇教)せざらむ〔次第6ウ〕、しやう(生)をも〔三曲24ウ〕、うんしやう(雲上)の〔三曲21オ〕、きうくわちやう(九花帳)の〔三曲21オ〕、はらふらん(払)〔次第8オ〕、かんわう(漢王)は〔三曲21オ〕
- ㊦ウ：りさんきう(驪山宮)の〔三曲16ウ〕、ちう、(中有)の〔三曲24ウ〕、ひうか(日向)〔三曲5オ〕、ひうかの〔三曲5ウ・23オ〕
- ㊦ウ：ゆふべの〔三曲16ウ〕
- ㊦ウ：ふけう(不孝)の〔三曲24ウ〕、戀(こひ)すてふ〔次第3ウ〕
- ㊦ウ：おうなにて〔三曲10オ〕、にほふらん〔三曲6ウ〕、すいちやうこうけい(翠帳紅閨)に〔三曲16オ〕、さそふ〔三曲11オ〕、ぞう(増)じ〔次第5オ・三曲20オ〕、てりそふ(照添)〔三曲6オ〕、とふ(問)まで〔次

第3ウ)、きのふ (昨日) は〔次第4ウ)、おもふ (思) と〔次第3ウ)、
くよふ (供養) の〔三曲24ウ)、おとろふ (衰)〔次第4ウ)、かげろふ
の〔次第5ウ・三曲4ウ〕

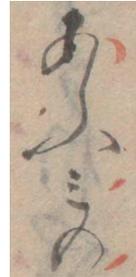
○一体型



あふぎ (扇)〔三曲17オ〕



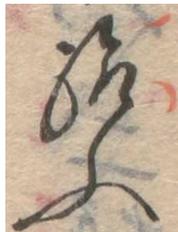
あふ (会) は〔三曲17オ〕



あふみ (淡海) の〔三曲13ウ〕



うれい (憂)〔三曲24オ〕



給(たま)ふ〔三曲5ウ〕



ふうふ (夫婦) の〔三曲14ウ〕

㊦イ：かひ (甲斐)〔三曲18ウ)、あたい (値)〔三曲11オ)、さいしよ (最初)の〔三曲24ウ〕

㊧イ：びすい (微睡) の〔三曲19ウ)、かんるい (感涙) を〔三曲21オ〕

㊨イ：せいきやう (清香)〔三曲11オ)、けいろふ (鶏籠) の〔三曲16オ)、
すいちやうこうけい (翠帳紅閨) に〔三曲16オ)、うれい (憂)〔三曲24オ〕

㊩イ：とひ (問)〔三曲23オ〕

㊪ウ：あふ (会) は〔三曲17オ)、あふぎ (扇) を〔三曲16オ)、あふぎ (扇)も〔三曲17オ)、あふぎ (扇)〔三曲17オ)、あふみ (淡海) の〔三曲13ウ)、ゑんあふ (鴛鴦) の〔三曲24オ)、かえりあふ (帰合)〔三曲

15オ)、かう (香) の〔三曲 21 オ)、かうべ (頭) に〔三曲 3 ウ)、ひざう (秘蔵) を〔次第 6 ウ)、まうもく (盲目) とさへ〔三曲 24 ウ)、くまふよ (汲)〔三曲 9 ウ)、給 (たま) ふ〔三曲 5 ウ)、きやうき (狂気) に〔三曲 18 オ)、せいきやう (清香)〔三曲 11 オ)、一しやう (生) は〔次第 4 オ)、しやうじぢやうや (生死長夜) の〔三曲 22 オ)、きんしやう (琴上) に〔三曲 16 オ)、むじやう (無常) の〔三曲 21 ウ)、ちやう (帳) の〔次第 4 ウ)、ちやう (帳) の〔三曲 19 ウ)、ぢやうあん (長安)〔三曲 21 オ)、しやうじぢやうや (生死長夜) の〔三曲 22 オ)、すいちやうこうけい (翠帳紅閨) に〔三曲 16 オ)、てならふ (手習)〔三曲 14 ウ)

㊦ウ：ふうふ (夫婦) の〔三曲 14 ウ)、ゆふ暮の〔三曲 17 オ)、ゆふしで (木綿四手) の〔三曲 18 オ)、ゆふべの〔三曲 16 オ)

㊧ウ：けふ (今日) は〔次第 4 ウ・三曲 19 ウ)、しゆんせう (春宵)〔三曲 11 オ)、れうがん (龍顔) に〔三曲 21 ウ)

㊨ウ：おう (負)〔三曲 24 ウ)、名にしほふ (負)〔三曲 11 ウ)、なにしほふ (負)〔三曲 15 オ)、どうけつ (洞穴) の〔三曲 16 ウ)、きのふ (昨日) は〔三曲 19 ウ)、おつぼう (仏法) の〔次第 8 オ)、ゑんよう (艷容)〔三曲 21 オ)、まよふなり (迷)〔三曲 24 ウ)、をとろふ (衰)〔三曲 20 オ)、かげろふ (蜻蛉) の〔三曲 20 オ・21 ウ)、けいろふ (鶏籠) の〔三曲 16 オ)

○無譜 or 一体型

最後に「無譜 or 一体型」の例を紹介しておく。



たまふ (給)〔三曲 3 ウ)



にぎはふ (賑)〔三曲 4 オ)

- ㊦イ：まいらん（参）〔三曲 25 オ・25 オ〕、かたらひ（語）〔三曲 16 ウ〕
 ㊦イ：いひなぐさむる（言慰）〔三曲 14 オ〕
 ㊦ウ：物ぐるひ（狂）と〔次第 7 ウ〕
 ㊦イ：こひ（恋）は〔次第 3 ウ〕、思（おも）ひを〔三曲 9 オ〕、おもひ（思）を〔三曲 24 オ〕、おもひ（思）の〔三曲 24 ウ〕
 ㊦ウ：ごさうごうしん（五想成身）の〔次第 6 ウ〕、ごさうごうしん（五想成身）の〔次第 6 ウ〕、たまふ（給）〔三曲 3 ウ〕、給（たま）ふ〔三曲 9 オ〕、にぎはふ（賑）〔三曲 4 オ〕
 ㊦ウ：きうくわちやう（九花帳）の〔三曲 21 オ〕
 ㊦ウ：ゆふ（夕）部に〔次第 5 オ〕、ゆうべ（夕）に〔三曲 20 オ〕
 ㊦ウ：しやかけうしゆ（釈迦教主）の〔次第 6 ウ〕
 ㊦ウ：そうきやう（崇教）せざらむ〔次第 6 ウ〕

一体型の例では、二重母音の後部要素にあたる仮名に対して、独立したゴマ点が与えられておらず、先行モーラと一体的に節付されている。これらはいずれも「つ」（あふぎ（扇）〔三曲 17 オ〕の例）「J」（ふうふ（夫婦）の〔三曲 14 ウ〕）のような長いゴマ点によって節付されている点が特徴的である⁴。

⁴ この「つ」なるゴマ点について禅竹伝書の同曲重複部分を比較してみる。禅竹伝書には、①『次第』と『三曲』の双方に収録されている曲、②『三曲』前半の曲例が挙げられている部分と同書巻末で部分的に例に出されている部分に、同じ句への施譜例が見出せるが、両者はあまり一致しない。このことから、禅竹の節付は固定的なものでなく、多分に即興的な性格の強いものであることがうかがわれる。さて、このうち片方の節付において2モーラに1つの「つ」が使用され、もう片方では2モーラに2つのゴマ点が使用されているのは、次の4例である（なお、ゴマ点の表示は次のように行った。「→」直ゴマ、「↗」上げゴマ、「↘」下げゴマ、「し」↘（長）と↗（短）の複合、「J」↘（短）+↗（長）の複合、「ㄣ」カーブしながら下降）。

すぐなるべきか	→し↘↘↘↘↘（『次第』祝言）	↘J↘×××↗（『三曲』祝言）
御法の	↗↘×↗（『三曲』祝言第二）	↗↗↘↘（『三曲』巻末）
人よりの	↗↘↗↘×（『三曲』恋慕）	↗↗↘↗↗（『三曲』巻末）
いつ	↘×（『三曲』恋慕）	↗↘（『三曲』巻末）

仮に直ゴマ「→」をM、上げゴマ「↗」をH、下げゴマ「↘」をLとして、2モーラに対応する「つ」がどのようなゴマ点に対応しているのかを確認すると、ピッチが落ちると推定されるものが3例（すぐなるべきか《ML》、御法（みのり）の《HM》、いつ《HL》）、上がると推定されるものが1例（人よりの《MH》）であった。「つ」の節がどのようなものか、この対応関係からは判然としないが、1モーラ目から2モーラ目にかけて一体的に下降させるものとして解釈しておく。

また無譜 or 一体型は二重母音の部分（影印掲載例における「たまふ」の「まふ」、「にぎはふ」の「はふ」）のみをみると一体型とも解することができるが、同一語にゴマ点が与えられないモーラがあるため（「たまふ」の「た」、「にぎはふ」の「に」）、念のため別に扱うものである。「たまふ」の「た」に譜が付されていない理由として、音高が自明であるなど、音楽上あるいは記譜法上の理由が考えられるが、すると二重母音の後部要素である「ふ」についても同じ理由で付されていないと解する可能性を否定できない⁵⁾。よってこのように同一分節の別の部分にゴマ点の欠損がある場合には、一体型の可能性が強いが記譜法上の省略である可能性も否定し得ない例と解し、念のため一体型とは見なさない⁶⁾。このような処置は以下の特殊モーラでも同じである。

以上のように、分離表記された二重母音については、無譜 or 一体型を除けば独立型と一体型の占める割合が拮抗しているなかで、やや独立型が優位である。次に融合表記を見る。

⁵⁾ 禅竹伝書では、特殊モーラでなくても、ゴマ点が付されない例が多く見られる（浅田 2023：4）。文節単位でみたとき、いずれかのモーラにゴマ点が付されない部分があるものは、その付されない理由として、次の2つの理由があると想定する。

①韻律における独立性の反映としてゴマ点が与えられない例。

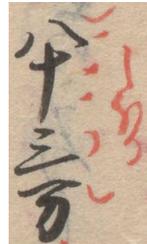
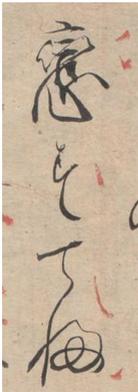
②言語的な要因でなく、記譜法等、他の何らかの理由でゴマ点が与えられない例。文節全体、文全体にゴマ点が与えられない場合、節回しのうえで音楽展開上節の指定が不必要な場合、音高に対してさして注意を要しない場合、前と同じ音高を保つ場合、伝授上節付の必要性が低い場合など、さまざまな言語外の理由によって省略されているとみられるもの。

本稿では、基本的には文節のすべてのモーラに譜が与えられるという状況において、拗音、母音連続の後部要素、促音、撥音に該当する部分のみにゴマ点が欠損している場合に、①であると認める。

⁶⁾ 禅竹伝書や、その後の謡本では、全体として基本的にモーラごとにゴマ点が与えられる独立型が普通であり、一体型は珍しい形式である。したがって、独立型の認定よりも一体型の認定について、より慎重に行うべきであると判断した。

〈融合表記〉

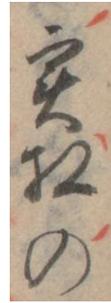
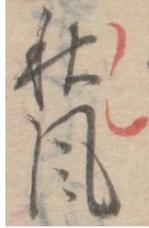
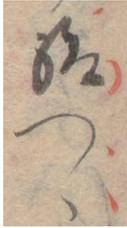
○独立型：



戀(こひ)すてふ〔次第3ウ〕 四海(しかい)の〔三曲4オ〕 八十三万(はちじゅうさんまん)〔三曲5ウ〕

- ㊦イ：四海(しかい)の〔三曲4オ〕、六千八百餘歳(ろくせんはつびやくよさい)なり〔三曲5ウ〕、第四(だいし)の〔三曲5ウ〕、時代(じだい)かな〔三曲6ウ〕
- ㊧イ：御誓願(ごせいぐわん)〔三曲4オ〕
- ㊨イ：戀(こひ)すてふ〔次第3ウ〕、思(おもひ)こそは〔三曲18ウ〕、思(おもひ)つづけて(続)〔三曲17ウ〕、思(おもひ)の〔三曲16オ〕、思(おもひ)も〔三曲18オ〕
- ㊩ウ：八十三万(はちじゅうさんまん)〔三曲5ウ〕、中納言(ちゅうなごん)〔三曲9オ〕、三五夜中(さんごやちゅう)の〔三曲21オ〕

○一体型：



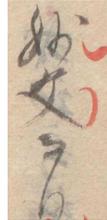
給 (たまひ) つつ〔三曲 5 ウ〕 秋風 (しゅうふう)〔三曲 17 オ〕 実相 (じつさう) の〔三曲 4 ウ〕

- ㊦イ：三界 (さんがい) は〔三曲 19 ウ〕、人界 (にんがい) を〔三曲 20 ウ〕、
給 (たまひ) つつ〔三曲 5 ウ〕、給 (たまひ) しに〔三曲 18 ウ〕
- ㊦イ：榮花 (えいぐわ) は〔三曲 19 ウ〕、青陽 (せいやう) の〔三曲 11 ウ〕、
名所 (めいしよ) は〔三曲 6 オ〕
- ㊦イ：恋 (こひ) に〔三曲 13 ウ〕、思 (おもひ) しられたり〔三曲 21 ウ〕、思
出 (おもひで) の〔三曲 8 オ〕
- ㊦ウ：実相 (じつさう) の〔三曲 4 ウ〕、雨露霜雪 (うろさうぜつ) の〔三曲
12 オ〕、天王寺 (てんなうじ) の〔三曲 24 ウ〕、仁徳天皇 (にんとくて
んなう) と〔三曲 14 オ〕、申 (まうす) も〔三曲 5 オ〕、青陽 (せいや
う) の〔三曲 11 ウ〕、行教和尚 (ぎやうけうくわしやう) の〔三曲 4 オ〕、
正直 (しやうぢき) の〔三曲 3 ウ〕、行教和尚 (ぎやうけうくわしやう)
の〔三曲 4 オ〕、御出生 (ごしゆつしやう)〔三曲 5 ウ〕、一生 (いつしやう)
は〔三曲 19 ウ〕、一行 (いちぎやう) の〔三曲 24 ウ〕、不定 (ふぢやう)
の〔三曲 22 オ〕、光明 (くわうみやう)〔三曲 24 ウ〕、老人 (らうじん)
なり〔三曲 7 ウ〕、王子 (わうじ) たちに〔三曲 5 ウ〕、光明 (くわうみ
やう)〔三曲 24 ウ〕
- ㊦ウ：秋風 (しゅうふう)〔三曲 17 オ〕、中納言 (ちうなごん)〔三曲 18 オ〕
- ㊦ウ：秋風 (しゅうふう)〔三曲 17 オ〕
- ㊦ウ：行教和尚 (ぎやうけうくわしやう) の〔三曲 4 オ〕、宗廟 (そうべう)
の〔三曲 3 ウ〕
- ㊦ウ：宗廟 (そうべう) の〔三曲 3 ウ〕、仏法 (ぶつぽう)〔三曲 24 ウ〕、重山
(ちやうざん) に〔三曲 16 オ〕

○無譜 or 一体型



和光(わくわう)の〔三曲7オ〕



妙文(めうもん)なり〔三曲22ウ〕

㊦ウ：一嶋(いつたう)の〔三曲5オ〕、八相道(はつしやうだう)を〔三曲3ウ〕、和光(わくわう)の〔三曲7オ〕

㊧ウ：妙文(めうもん)なり〔三曲22ウ〕

以上のように、融合表記された詞章に対する節付を見ると、二重母音の後部要素に対して一体型の節付が施されている例が優位である。この点で、分離表記と融合表記では後部要素の独立性に差があり、融合表記は分離表記に比して一体型が多くなりやすい傾向が見て取れる。

さて、二重母音をさらに細分化してみると、次のように偏りが見られる。参考として、前稿で母音接続と判断した㊦イ、㊧イ、㊨イ、㊩イとともに表2として掲げる。

ここから分かるように、

表2 禅竹伝書における二重母音後部要素の節付(種類別)

		独立型	一体型	無譜 or 一体型	計	
分離表記	二重母音	㊦ウ	10	25	5	40
		㊧ウ	2	4	1	7
		㊨ウ	1	4	2	7
		㊩イ	3	4	0	7
		㊪ウ	14	12	1	27
		㊫ウ	5	0	1	6
	母音接続	㊬イ	16	3	3	22
		㊭イ	1	0	1	2
		㊮イ	3	2	1	6
		㊯イ	20	1	4	25
融合表記	二重母音	㊦ウ	0	17	3	20
		㊧ウ	0	2	1	3
		㊨ウ	0	1	0	1
		㊩イ	1	3	0	4
		㊪ウ	0	3	0	3
		㊫ウ	3	2	0	5
	母音接続	㊬イ	4	4	0	8
		㊭イ	5	3	0	8
総計		88	90	23	201	

分離表記でも融合表記でも、内部の相対的關係において一体型の割合の高い母音連続として、㊦ウ、㊧ウ、㊨ウ、㊩イ、㊪ウが挙げられる。前稿では、㊦イ、㊧イ、㊨イ、㊩イ、㊪イ、一エ、一オと比して一体型が多いこれらの母音連続を二重母音としたうえで、二重母音のなかにも特に一体型の多い㊦ウ、㊧ウ、㊨ウ、㊩イは長音化している可能性が高く、㊪ウは相対的に長音化が著しくないのではないかと考えた（ただし㊪ウが独立型が目立つことについては、伝承音として割って謡われていることによって独立型が多いと解し、口頭語では㊪ウも拗長音化していると推定した）。詳細な検討は前稿に譲り、ここでは長音化している可能性が高い二重母音は一体型で節付される場合が多く、母音接続は独立型で節付されることが多いことを確認しておく。

またこれらの一ウに関連して、迫野 1987 では、中世における撥音について、ンで表記される /n/ のほかにウで表記される /ŋ/ を想定する方が、バ行マ行のウ音便・撥音便の分布、オノマトペ、中世・近世唐音の受け入れ方などをうまく説明できるという提案が為されている。ただし、中国語の喉内鼻音韻尾 -ŋ を一ウ・一イ表記で受け入れた呉音・漢音において、鼻音性がいつまで保たれていたのかについては、必ずしも明確でない。この問題について、漢字音では室町中期頃から ŋ 韻尾後の連濁（連声濁）例がなくなることを理由に、室町時代以前に非鼻音化を完了し、母音韻尾 -u に合流したとの意見がある（沼本 1997: 710-711）。

これらの指摘を受けて、禅竹伝書の一ウ・一イのうち漢語に使用される例について、中古音との対応関係を確認しておく⁷⁾。禅竹伝書に見られる一ウ、一イを ŋ 韻尾と u・i 韻尾に分けて考えると、表 3 のような結果が得られる（無譜 or 一体型 9 例は除く）。

この節付の様式の分布を見ると、分離表記、融合表記それぞれにおいて、鼻音系韻尾 (-ŋ) を原音に持つ一ウ・一イの方が、母音系韻尾 (-u・-i) を原音に持つ一ウ・一イよりも一体

表 3 漢語一ウ・一イの中古音韻尾別の独立性

		独立型	一体型	計
分離表記	-ŋ	11	20	31
	-u・-i	4	5	9
融合表記	-ŋ	2	22	24
	-u・-i	2	5	7

⁷⁾ 和語の一ウ・一イについては、無譜 or 一体型 5 例を除く 45 例のうち、で /-ŋ/ が疑われるのは「日向」の 3 例（いずれも独立型）のみであり、/-W/ との比較が難しいため、検討の対象から外す。

型が現れやすいという傾向が看取される。ここから、禅竹伝書の15世紀の謡曲唱詠において、まだ漢字音に喉内鼻音韻尾が保存されており、鼻音韻尾よりも母音韻尾の方が独立性が高かった可能性が指摘できる。

ただしその場合、前稿で指摘した二重母音の種類による節付の差異との関係が問題となる。特に㊦ウと㊧ウの差について、前稿では㊦ウの方が㊧ウよりも一体型での施譜例の割合が多く、それは長音化のしやすさが影響していると解釈した。そこで例の多い分離表記の40例に注目すると、表4に見られるような分布となる。

例が少なくこの表から何らかの帰結を導くのは危険だが、例数の多い鼻音韻尾(-ŋ)の㊦ウと㊧ウを見ると、㊦ウは独立型4例、一体型15例（以下これを独4/体15のように記す）で一体型優位、㊧ウは独4/体3でほぼ拮抗している状態であり、鼻音系のなかでも㊦ウと㊧ウの違いを見いだすことができる。このことから、鼻音韻尾のなかでも二重母音の種類による節付への影響は認めることができ

表4 分離表記における二重母音の種類と韻尾による節付の整理

		独立型	一体型	計
-ŋ	㊦ウ	4	15	19
	㊧ウ	2	0	2
	㊨イ	1	1	2
	㊩ウ	0	1	1
	㊪ウ	4	3	7
-u・i	㊦ウ	2	0	2
	㊧ウ	0	1	1
	㊨イ	1	2	3
	㊩ウ	1	1	2
	㊪ウ	0	1	1

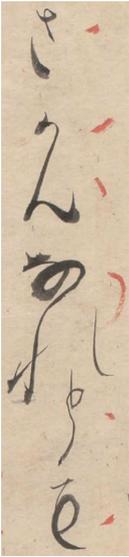
るが、一方で、鼻音系 -ŋ と母音系 -u・i の間の区別については、母音系の用例の少なさ（㊦ウ独2/体0、㊧ウ独0/体1）により、㊦ウでも㊧ウでも明確な差を見出すことは難しいと判断する。したがって本稿では、前稿で論じた通り、㊦ウと㊧ウが長音化のしやすさによって独立性に差があることを重視し、二重母音の種類が節付に影響することを認める一方で、禅竹伝書の時点における鼻音韻尾 -ŋ と母音韻尾 -u の区別については判断を保留し、区別がある可能性を指摘するに留めたい。

5.2 撥音

次に撥音について節付の様相をみる。和語の撥音と、漢語の鼻音韻尾二種(-m, -n)を対象に禅竹伝書の節付を調査した。以下に数例ずつ影印を掲げたのち、全例を掲出する。

〈分離表記〉

○独立型



さかななれども〔次第4ウ〕



ながらへん〔三曲8ウ〕



なるらん〔三曲11ウ〕



さん (散)じ〔次第4オ〕



かいがん (海岸)を〔三曲5オ〕



にんげん (人間)〔三曲24オ〕

撥音便 (和語)：さかな (盛)なれども〔次第4ウ・三曲19ウ〕

助動詞 (和語)：いと (厭)ひけん〔三曲24オ〕、きえん (消)と〔次第4オ・三曲19ウ〕、ながらへん (永)〔三曲8オ〕、あけなんとして (明)〔三曲16オ〕、やみなん (止)〔三曲13オ〕、あき (秋)ならん〔三曲7オ〕、をくるらん (送)

[三曲 10 ウ)、こゝろ (心) なるらん [三曲 11 ウ)、しらすらん (知) [次第 5 ウ・三曲 20 オ)、すまざらん (澄) [次第 7 ウ)、そうきやう (崇教) せざらむ [次第 6 ウ)、つぐくらむ (続) [次第 3 オ)、はらふらん (払) [次第 8 オ)、みがくらん (磨) [次第 1 ウ)、いはん (云) [三曲 9 オ)、いはんや [三曲 24 オ) 鼻音韻尾 (漢語) : かんるい (感涙) を [三曲 21 オ)、かいがん (海岸) を [三曲 5 オ)、ぐわんりき (願力) の [次第 4 ウ)、御せいぐわん (誓願) [三曲 11 ウ)、ぐんしゆ (群集) も [次第 2 オ)、にんげん (人間) [三曲 24 オ)、はんごん (反魂) の [三曲 21 ウ)、さん (散) じやすく [次第 4 オ)、さんげ (懺悔) の [三曲 4 ウ)、りさんきう (驪山宮) の [三曲 16 ウ)、ざんげん (讒言) に [三曲 24 ウ)、ごさうごうしん (五想成身) の [次第 6 ウ)、きせむ (貴賤) の [次第 2 オ)、きせん (喜撰) が [三曲 10 オ)、千金 (せんきん) にも [三曲 11 オ)、ぜんかん (禅観) の [次第 7 オ)、いらんでん (猗蘭殿) の [次第 4 ウ)、にんがひ (人界) を [次第 6 オ)、にんげん (人間) [三曲 24 オ)、はんごん (反魂) の [三曲 21 ウ)、はんちよ (班女) が [三曲 17 ウ)、へん (変) じて [三曲 20 オ)、べん々 (便々) と [三曲 21 オ)、いらんでん (猗蘭殿) の [次第 4 ウ)、らんかん (欄干) に [三曲 16 ウ)

○一体型



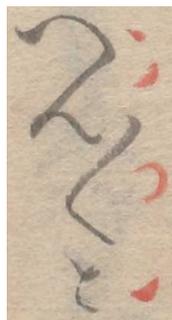
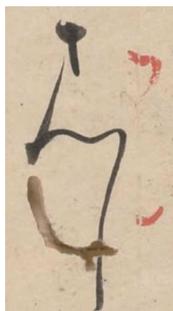
にほふらん [三曲 6 ウ)



ありんと [三曲 18 ウ)



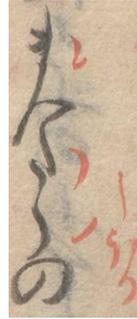
せんかた [三曲 19 オ)



さん (散)じ〔次第5オ〕 らんかん (欄干)に〔三曲16ウ〕 べん (便々)と〔三曲21オ〕

撥音便 (和語) せんかた〔三曲19オ〕、ありなんと〔三曲18ウ〕、にはふらん (句)〔三曲6ウ〕、みがくらん (磨)〔三曲3オ〕、もらすらん (漏)〔三曲16ウ〕
 鼻音韻尾 (漢語)：ぢやうあん (長安)〔三曲21オ〕、えん (縁)こそ〔三曲15オ〕、ゑんよう (艶容)〔三曲21オ〕、ゑんあふ (鴛鴦)の〔三曲24オ〕、かんせんでん (甘泉殿)の〔三曲21オ〕、ぜんかん (禅観)の〔次第7オ〕、らんかん (欄干)に〔三曲16ウ〕、れうがん (龍顔)に〔三曲21ウ〕、きんしやう (琴上)に〔三曲16オ〕、せんきん (千金)にも〔三曲11オ〕、ぐわんりき (願力)〔次第4ウ・三曲19ウ〕、ぐわんりき (願力)の〔三曲20オ〕、ざんげん (讒言)に〔三曲24ウ〕、さんかひ (三界)は〔次第4オ〕、さん (散)じ〔次第5オ・三曲20オ〕、しゆんせう (春宵)〔三曲11オ〕、しんによ (真如)の〔次第7ウ〕、りふじん (李夫人)の〔三曲21オ・21オ〕、りふじん (李夫人)な〔三曲21ウ〕、かんせんでん (甘泉殿)の〔三曲21オ〕、ぜん (前世)に〔三曲24オ〕、だんせつ (団雪)の〔三曲17オ〕、かんせんでん (甘泉殿)の〔三曲21オ〕、きらんでん (猗蘭殿)の〔三曲19ウ〕、べん (便々)と〔三曲21オ〕、きらんでん (猗蘭殿)の〔三曲19ウ〕、ひよくれんり (比翼連理)の〔三曲16ウ〕

○無譜 or 一体型

うんしゃう (雲上) の〔三曲 21 オ〕⁸⁾

まんだら (曼荼羅) の〔三曲 24 ウ〕

助動詞 (和語) : まいらん (参) 〔三曲 25 オ・三曲 25 オ〕

鼻音韻尾 (漢語) : あんけつだう (闇穴道) の〔三曲 24 ウ〕、うんしゃう (雲上) の〔三曲 21 オ〕、かんわう (漢王) は〔三曲 21 オ〕、まんだら (曼荼羅) の〔三曲 24 ウ〕

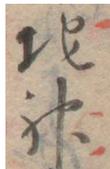
以上の例をみると、撥音が仮名によって表記される分離表記の場合は、独立型と一体型の頻度は拮抗している。次に融合表記の例をみる。

〈融合表記〉

○独立型



萬 (ばん) 民に〔次第 7 ウ〕



地神 (じん)〔三曲 5 ウ〕

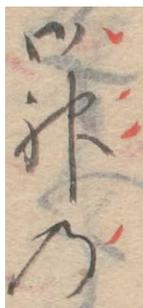


新 (しん) 月の〔三曲 21 オ〕

⁸⁾ この例ではゴマ点の右側に「しほる」という注記が為されている。これは「上音から更に一段高い音階に上げて歌う節」を指定するもので、金春系統の節付の特徴とされる。観世系統で同じ節を指定するのに「クル」を用いる (表 1965 : 15)。

鼻音韻尾（漢語）：安楽（あんらく）の〔三曲4オ〕、臣（しん）〔三曲7ウ〕、
 月神（ぐわちじん）〔三曲5オ〕、新月（しんげつ）の〔三曲21オ〕、地神（ぢ
 じん）〔三曲5ウ〕、日神（にちじん）〔三曲5オ〕、天下（てんか）を〔三曲
 5ウ〕、天（てん）の〔三曲12オ〕、天（てん）も〔三曲12オ〕、人間（に
 んげん）〔三曲21ウ〕、萬民（ばんみん）に〔次第7ウ〕

○一体型



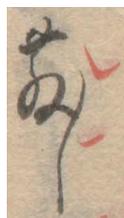
御（おん）神の〔三曲5オ〕



玉殿（でん）の〔三曲3オ〕



中納言（ごん）〔三曲9オ〕



散（さん）じ〔三曲19ウ〕

撥音便（和語）：御（おん）かたち〔三曲21オ〕、御神（おんがみ）の〔三曲5オ〕、
 御（おん）袖を〔三曲21ウ〕、御（おん）たてゑほし〔三曲18ウ〕、御代（お
 んよ）を〔三曲5ウ〕、御代（おんよ）も〔三曲5ウ〕

鼻音韻尾（漢語）：千金（せんきん）〔三曲11オ〕、権現（ごんげん）と〔三曲
 5ウ〕、地主権現（ぢしゅごんげん）の〔三曲11ウ〕、人間（にんげん）〔三
 曲21ウ〕、権現（ごんげん）と〔三曲5ウ〕、中納言（ちうなごん）〔三曲9
 オ・18オ〕、地主権現（ぢしゅごんげん）の〔三曲11ウ〕、三界（さんがい）
 は〔三曲19ウ〕、三五夜中（さんごやちう）の〔三曲21オ〕、散（さん）じ
 やすく〔三曲19ウ〕、八十三万（はちじうさんまん）〔三曲5ウ〕、重山（ち
 ようざん）に〔三曲16オ〕、神徳（じんとく）は〔三曲4オ〕、老人（らう
 じん）なり〔三曲7ウ〕、千金（せんきん）〔三曲11オ〕、六千八百餘歳（ろ
 くせんはつびやくよさい）なり〔三曲5ウ〕、天王寺（てんなうじ）の〔三
 曲24ウ〕、仁徳天皇（にんとくてんなう）と〔三曲14オ〕、玉殿（ぎよくで
 ん）に〔三曲21オ〕、玉殿（ぎよくでん）の〔三曲3オ〕、人界（にんがい）

を〔三曲 20 ウ〕、仁徳天皇（にんとくてんなう）と〔三曲 14 オ〕、八十三万（はちじうさんまん）〔三曲 5 ウ〕

○無譜 or 一体型

助動詞（和語）：御（おん）すがた〔三曲 21 ウ〕

鼻音韻尾（漢語）：御誓願（ごせいぐわん）〔三曲 4 オ〕、二神（にじん）〔三曲 22 ウ〕、妙文（めうもん）なり〔三曲 22 ウ〕

撥音が漢字によって表記される融合表記の場合、一体型が優位であり、分離表記に比して撥音付きの重音節が一体的に節付されている傾向が強い。

次に撥音の種類による偏りについて、確認しておく。ここでは和語の撥音便（御（おん）、せんかた。動詞の撥音便は禅竹伝書には現れなかった）、和語の助動詞（む、らむ、けむ）に含まれる撥音、漢語の鼻音韻尾に分類した。

表 5 禅竹伝書における撥音の節付（語種別）

		独立型	一体型	無譜 or 一体型	計
分離表記	撥音便	2	1	0	3
	助動詞	18	4	2	24
	鼻音韻尾	25	30	4	59
融合表記	撥音便	0	6	1	7
	鼻音韻尾	11	24	3	38
総計		56	65	10	131

まず分離表記について、和語の撥音便は例が少なく、「さかなれども」の独立型 2 例と、「せんかた」の一体型 1 例のみであり、助詞・助動詞類は独立型が多数であった。漢語の鼻音韻尾は独立型と一体型が拮抗しており、やや一体型が多い。このうち撥音便は 3 例のみなので評価しがたいが、助動詞と鼻音韻尾の間には差が認められ、助動詞類の独立性が高いのに対して、鼻音韻尾は一体型で節付される可能性が高く、非独立的であると言える。助動詞「む」「らむ」「けむ」が関与する撥音の独立性が鼻音韻尾に比して高いことについては、6 節で改めて取り上げて考える。

次に融合表記について、和語の撥音便では一体型で統一されているのに対し、漢語の鼻音韻尾では一体型優位の傾向のなかで独立型の節付も見える。撥

音便と鼻音韻尾で一体型の占める割合を比べると撥音便の方が高くなる（撥音便＝独 0/ 体 6、鼻音韻尾＝独 11/ 体 24）。このうち融合表記された撥音便は「御（おん）」に限られており、この極端な分布は融合表記に一体型が現れやすいとは言え、やや不自然である。またこの語の表記はすべて融合表記（漢字表記）で、仮名書きの例がないことも、禅竹伝書では珍しい⁹⁾。ここでは、禅竹はこの語に対する表記、節付を意識的に固定していたと解釈し、独立的性が節付に反映されているのではなく、禅竹の記譜法の特徴として捉える方が妥当であると判断しておく。

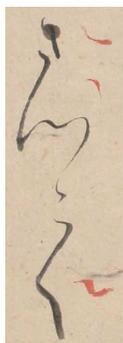
以上、分離表記では助動詞と鼻音韻尾の間に差が認められること、融合表記では撥音便と鼻音韻尾の間に差が認められることを指摘した。これらの独立性の位置づけについては、他の特殊モーラも含めて6節で行うことにする。

5.3 促音・入声音

続いて促音および入声音への施譜について述べる。ここでは和語の促音便の例と、漢語の舌内入声音、喉内入声音、ハ行転呼を被っていないと考えられる唇内入声音の例を扱う。

〈分離表記〉

○独立型



さつて (去) [次第 5 オ]

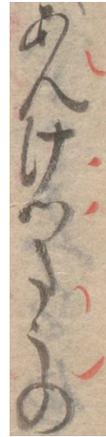


一こく (刻) [三曲 11 オ]

⁹⁾ 助詞・助動詞を除く頻度 10 以上の語（花、月、給ふ、世、心、春、影、げに、有り、国、山、上、無し、人、これ、この、秋、今）18 語のうち、融合表記に統一されている語は「月」「山」「秋」の 3 語、仮名表記に統一されている語は「げに」「有り」「無し」の 3 語、両方の表記が見られるのが残りの 12 語であった。



ぐわんりき (願力) の〔三曲 20 オ〕

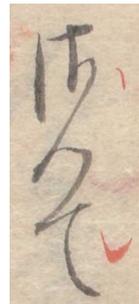


あんけつだう (闇穴道) の〔三曲 24 ウ〕

和語：さつて (去)〔次第 5 オ〕

漢語：一 (いつ) こく (刻)〔三曲 11 オ〕、かくやく (赫奕) として〔三曲 24 ウ〕、あんけつだう (闇穴道) の〔三曲 24 ウ〕、だんせつ (団雪) の〔三曲 17 オ〕、じつとく (拾得) は〔次第 8 オ〕、まうもく (盲目) とさへ〔三曲 24 ウ〕、かくやく (赫奕) として〔三曲 24 ウ〕、ひよくれんり (比翼連理) の〔三曲 16 ウ〕、ぐわんりき (願力)〔次第 4 ウ・三曲 19 ウ〕、ぐわんりき (願力) の〔三曲 20 オ〕

○一体型

きたつて (来)〔三曲 20 オ〕さつて (去)〔三曲 20 オ〕



ぶつぼう (仏法) の〔次第 8 オ〕



けつ (欠) すとか〔次第 5 オ〕



どうけつ (洞穴) の〔三曲 16 ウ〕

和語：さつて (去)〔三曲 20 オ〕、きたつて (来)〔三曲 20 オ〕

漢語：けつ (欠) すとか〔次第 5 オ〕、けつ (決) すとか〔三曲 20 オ〕、どう
けつ (洞穴) の〔三曲 16 ウ〕、ぶつぼう (仏法) の〔次第 8 オ〕

以上のように、例が少ないものの、分離表記では独立型の方がやや優勢であることが確認される。ただし漢語の入声音については、実現形が開音節化していると考えられるもの、促音化しているもの等が混在していることが予想されるため、のちにより音環境を細分化し、詳しく検討したい。

なお禅竹伝書においては、和語の動詞は仮名で表記されることが多く⁽¹⁰⁾、促音便が疑われる例(「去て」など)はない。動詞の連用形の促音便以外の促音も現れないので、和語の促音の例は以上の独立型の 1 例、一体型の 2 例に限られる。

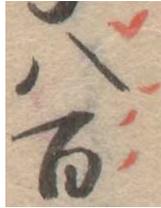
¹⁰ ただし複合動詞の前部要素が漢字の場合はいくらかある。「染なして」「吹おちて」「思つて」など。

〈融合表記〉

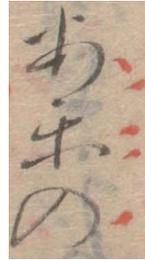
○独立型



落花 (らつくわ) は [三曲 10 ウ]



八百 (はつびやく) [三曲 5 ウ]



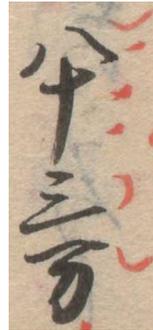
安楽 (あんらく) の [三曲 4 オ]



正直 (しやうぢき) の [三曲 3 ウ]



新月 (しんげつ) の [三曲 21 オ]



八十三万 (はちじうさんまん) [三曲 5 ウ]

和語：なし

漢語：玉殿 (ぎよくでん) の [次第 1 ウ]、玉殿 (ぎよくでん) の [三曲 3 オ]、
 月神 (ぐわちじん) [三曲 5 オ]、新月 (しんげつ) の [三曲 21 オ]、気色 (けしき) に [三曲 21 オ]、正直 (しやうぢき) の [三曲 3 ウ]、神徳 (しんとく) は [三曲 4 オ]、仁徳天皇 (にんとくてんなう) と [三曲 14 オ]、八十三万 (はちじうさんまん) [三曲 5 ウ]、六千八百餘歳 (ろくせんはつびやくよさい) なり [三曲 5 ウ]、六千八百餘歳 (ろくせんはつびやくよさい) なり [三曲 5 ウ]、安楽 (あんらく) の [三曲 4 オ]、落花 (らつくわ) は [三曲 10 ウ]

○一体型



一 (いつ) しゃうは〔次第4オ〕



六 (ろく) 千八百餘歳なり〔三曲5ウ〕



日 (にち) 神〔三曲5オ〕

和語：なし

漢語：一行 (いちぎやう) の〔三曲24ウ〕、一 (いつ) こく (刻)〔三曲11オ〕、一 (いつ) しゃう (生) は〔次第4オ〕、一生 (いつしやう) は〔三曲19ウ〕、玉殿 (ぎよくでん) に〔三曲21オ〕、雪月花 (せつげつくわ) の〔三曲12オ〕、実相 (じつさう) の〔三曲4ウ〕、御出生 (ごしゅつしやう)〔三曲5ウ〕、雪月花 (せつげつくわ) の〔三曲12オ〕、雨露霜雪 (うろさうぜつ) の〔三曲12オ〕、徳 (とく) を〔三曲12オ〕、日神 (にちじん)〔三曲5オ〕、仏法 (ぶつぽう)〔三曲24ウ〕、末世 (まつせ) と〔三曲24ウ〕、六千八百餘歳 (ろくせんはつぴやくよさい) なり〔三曲5ウ〕

以上のごとく、融合表記の和語の例は見当たらず、漢語の例では独立型と融合型が拮抗していることが確認された。

ここで漢語の場合において、入声音の音価と節付がどのような関係にあるのかを確認することにより、15世紀半ばの謡において入声音がどのように実現していたのかを考えてみたい。

上に挙げた入声音の用例については、舌内入声の閉音節 (-t)、促音、ノム音 (鼻的破裂音・-n̥) など、多様な音価が想定され、それと節付との関係が問題となる。キリシタン資料に現れる「nitguet」等の母音が付加されない表記についての、橋本1928による「少くとも或場合にはtと発音した」(262)という推定に対して、近年の研究では、肥爪2019が「[-tʲ] [-tʲ]のような無声母音を付加する形で再開放が行われていた」(406)というような意見も提出されている。また後続環境や位相・発話者の属性によって鼻的破裂音での実現や閉音節化が起こることが諸氏によって指摘される。

ひとまず沼本（1982：1099）によって、促音化が起こる条件を次のように想定しておく。

- ・唇内入声・舌内入声：無声子音が後接する場合
- ・喉内入声：カ行子音が後接する場合

また、特に舌内入声の閉音節の残存について、柳田 1993 は、口語を反映する資料として天草版伊曾保物語を取り上げ、次のような結果を報告している。

表6 『天草版伊曾保物語』の t 入声音（柳田 1993：426 表2を整形）

		促音化形	入声音形	開音節化形
語末		0	36	10
語中	有声音後続	0	6	18
	無声音後続	33	0	3

このようにキリシタン資料における舌内入声は、表網掛けの部分で示されるように、語末の場合は入声音形（閉音節形）もしくは開音節形（ただし入声音形が優勢）で、有声音音に続く場合は入声音形もしくは開音節形（ただし開音節形が優勢）で、無声子音に続く場合は主に促音で現れる。

一方謡曲については、有声音音前と語末の双方の環境で、いわゆるノム音、鼻的破裂音として実現しているという報告がある。橋本 1928 は、キリシタン資料に現れる t が閉音節性を保っている論拠として、謡曲に普通の tu には見られない音変化が見られることを挙げる。そして謡曲に見られる音変化として、次のような相補分布を見て取る（橋本 1928：261-263 を筆者が整理）。

- ・母音が後続する t：
 - t+'i → -ti 発音（ハッチン）、-t+'e → -tte 佛慧（ブッテ）【促音系連声】
- ・カサタハ行が後続する t：
 - t+k → -kk 節句（セック）、-t+s → -ss 佛説（ブッセツ）【促音化】
- ・濁音・鼻音が後続する t：
 - t+'ŋ → -tŋ 渴仰（カ^tガウ）、-t+n → -tⁿ 刹那（セ^tナ）【鼻的破裂音化】

このような謡における相補分布を指摘したうえで、中世において舌内入声は基本的に開音節化していなかったからこそこれらの音変化が起こったのであり、それがキリシタン資料の t 表記に反映されていると考える。また岩淵 1934 は『観世流謡曲全集』（1928・1929 刊）によって現在の謡曲における条件を整理し、例外を示しつつもほぼ同様の分布の様相を報告している。さらに坂本 2022 は江戸期の明和改正謡本における舌内入声への注記について、無声子音とラ行に続く場合は〈ツメル〉（促音）が、ラ行以外の有声子音に続く場合は〈呑〉（鼻的破裂音）が現れることを指摘した（坂本 2022：42）。

このように、中世における入声類の実現については、さまざまな音価が想定されているのであるが、ここでは、先学によって示されたさまざまな音価推定を参考に後続環境によって切り分けたいと、それぞれの環境ごとに節付の様式を見ていく。なおそれぞれの環境で想定される実現形として、いくつかの可能性を列挙しておく（次頁表 7）。

このうち、唇内入声、喉内入声については、室町時代の謡曲における実現形が、後接環境によって同化形である促音化形、非同化形であるハ行転呼形一ウ・開音節形 *-ki, -ku* にほぼ定まっていると考えられ、特に問題はない（ただし唇内入声については、無声子音前で非同化形一ウが現れる場合（*Gôsa*（業作）、*Nhucocu*（入国）等）もある）。また舌内入声も、無声子音前は促音化していると考えてよいだろう¹¹。よって問題となるのは、無声子音以外に前接する環境（表網掛け部分）における、舌内入声の音価ということになる。それぞれ同化形、非同化形の可能性があり、さらに非同化形には大きく分けて開音節形（母音添加形）、閉音節形（非母音添加形）¹²、鼻的破裂音形の可能性をそれぞれ有する。

¹¹ ただし犬飼 2012 は日葡辞書の無声子音前の舌内入声を調査し、柳田 1993 と同様に無声子音の前は促音化していることを確認しつつ、例外として *Betxin*（別心）、*Betchoku*（別勅）、*Burqua*（仏果）、*Burchiye*（仏知恵）という閉音節非促音化形を挙げる（82, 83）。このことに関わり森田 1993 は同様に無声子音前の喉内入声・唇内入声を t で表記する *Azqet*（墨血）、*carshū*（甲冑）等を挙げ、「これらは、入声 t がカ・サ・タ・ハ行音の前ではほとんど規則的に促音化したので、それに類推して t に還元して表記した」（207）あるいは「入声も促音も「つ」と表記する仮名表記に基づいた」（207）という解釈を示している。本稿もこれらは促音化しているが、それが表記上に反映されず、露出形（「Bet（別）」、「But（仏）」）の表記が尊重された結果と解す。

¹² 閉音節形（非母音添加形）には、細かく言えば無開放の [ɸ]、開放の伴う [t] の可能性があるが、本稿の採る方法ではこれらの差を実証するのは不可能であると判断し、おおまかに有声の母音が添加されない形として閉音節形を捉え、[t] で表現する。また、肥爪 2019：406 で提案されているような無声母音付加形 [-tj, -tɕ] についても、聞こえのある有

表7 中世語で想定される音価による入声音の分類

入声音の種類	後続環境	非同化／同化	想定される実現形
唇内入声	無声子音 (カ・サ・タ・ハ／パ行)	同化形 ¹	促音 (-k, -s, -t, -p)
	無声子音以外	非同化形	母音 (-u)
舌内入声	無声子音 (カ・サ・タ・ハ／パ行)	同化形	促音 (-k, -s, -t, -p)
	ガ・ザ・ダ・バ行 (前鼻音が想定される濁音)、ナ・マ行	同化形	鼻的破裂音形 (-t ⁿ)
		非同化形	閉音節形 (-t)／開音節形 (-ti, -tu)
	母音 (ア・ヤ・ワ行)	同化形	促音 (-t : 促音系連声)
		非同化形	閉音節形 (-t)／開音節形 (-ti, -tu)／鼻的破裂音形 (-t ⁿ)
	ラ行	同化形	促音 (-r)
		非同化形	閉音節形 (-t)／開音節形 (-ti, -tu)／鼻的破裂音形 (-t ⁿ)
	語末	非同化形	閉音節形 (-t)／開音節形 (-ti, -tu)／鼻的破裂音形 (-t ⁿ)
喉内入声	カ行	同化形	促音 (-k)
	カ行以外	非同化形	開音節形 (-ki, -ku)

¹ 唇内入声のうち「立」「雑」「接」などの一部の同化形は舌内入声と誤認され、舌内入声と同じ挙動をとる (小松 1956)。

まずガ・ザ・ダ・バ行、ナ・マ行が後続する場合 (入声音が助詞ノに前接する場合も含む) は、濁音の鼻音性を前提として同化形の鼻的破裂音での実現が疑われるが、キリシタン資料の *matbō* (滅亡) のような綴りを素直に受け取れば非同化形である閉音節形での実現も考えられる。また同じ非同化形として、*ychibai* (一倍) のような開音節形も考えられる⁽¹³⁾。

声母音が添加されない形として、閉音節形のバリエーションの一つとして捉えておく。なお先行研究への言及などでは、必要に応じて [-t̚] [-tj] [-tj̥] 等を用いることがある。

¹³ 現代語の諸方言まで視野に入れると、濁音前では促音で実現する可能性もある。高山 1993 は、濁音前で「コッコ」(国語)、「カッジャ」(鍛冶屋)、「テッドー」(鉄道) 等のように促音で実現する方言の例が鹿児島・福岡・長崎等の方言に豊富に拾えること、その使用方言が濁音前の入りわたり鼻音を残す方言と相補的に分布することを指摘する。すなわち、濁音に前鼻音の残っていない方言では濁音前の促音が現れやすく、前鼻音の残っている方言では濁音前の促音が現れにくいと言う。また森田 1993 では『日葡辞書』について、Fiddai (筆台)、Bazzui (抜髓)、Zozo. I, zozzoto (ゾゾ、または、ゾゾット) が孤例として指摘されており (204-205)、濁音前の t 形として Betgui (別儀)、Betji (別時・別事)、Betjin (別人) 等

次に母音類（半母音 w・j、助詞ヲ・へも含む）が後続する場合は、同化形として促音系連声が疑われるが、キリシタン資料では Xecchin（雪隠）、Xetchin（雪隠）等が拾えるものの、出現はまれである⁽¹⁴⁾。母音前環境では Ychiyen（一円）、Xechiye（節会）、Iichiiqi（日域）、Butuon（仏恩）など開音節形が多くを占め、Xitin（漆隠）、buti（仏意）、Butuon（仏恩）、Xetye（節会）などの閉音節形も見られる。また坂本 2022 の謡曲譜調査では促音系連声を示す「ツメル」のほかに鼻的破裂音を示す「含」も多く使用されることが報告されている（35, 37）。「花月^{クハゲツ}は」（「月」字に「ツメル」の注記）、「獄卒^{ゴクソツ}阿坊羅刹^{アバウラセツ}」（「卒」字に「含」の注記）、「庵室^{アンジツ}へ」（「室」字に「含」の注記）等が挙例されるが、このうち「含」が付された鼻的破裂音は、後続母音の影響とは考えられないから、同化形とはみなせず、非同化形として扱う。このように母音前に位置する舌内入声音は、その実現形にさまざまな可能性がある。

またラ行子音に後続する場合は、岩淵 1934 の『観世流謡曲全集』（1928・1929 刊）の調査によれば、促音（ツメル）の場合と鼻的破裂音（含）の場合とがあると言う（191-192）が、坂本 2022 による明和改正謡本（1765 刊）の調査では、鼻的破裂音は見当たらずツメル（促音）のみであるとする（36）。また日葡辞書では、Ichiran（一覽）のような開音節化形（ただし -tçur- は見当たらない）、Botracu（没落）のような閉音節形が見られ、このうち閉音節形の音価は、母音類の前の「t」と同様、促音形、閉音節形、鼻的破裂音形のいずれの可能性もあろう。ただし、「-rr-」の綴りは管見に及ばない。

語末に位置する場合（文節境界が後接し、後続音からの影響を受けないと想

が開音節形とともに挙げられている（201）。ただし dd, zz はごく少数の例外的な例であり、Betgui（別儀）等は森田 1993 でも「漢字本来の字音に従って入声形を用いる傾向も強かった」（202）とし、促音形というよりは閉音節形と解している。濁音前に促音が出現する可能性について、本稿では禅竹伝書の時代において濁音に前鼻音が残っていたという解釈をとっており、高山 1993 の指摘する前鼻音が消失しているという分布条件から外れていること、また中世において濁音前の促音を認めると、現代京都方言において認められないことについてさらに複雑な過程を想定する必要があり、そのような想定を支える積極的な徴候も見取れないことから、音価推定の候補からは外すことにする。

¹⁴ 森田 1993 は『日葡辞書』において入声音が関与する連声として Xecchin（雪隠）、Xöjenbattacu（賞善罰悪）を挙げている。また鼻音韻尾が関与する連声と合わせて、「上掲の諸条は、撥音 n および入声 t の連声現象の存したことを示すものであるが、その数は、語音結合の条件をそれらと同じくする語で、原形だけを掲げたものに比べて、著しく少ない。（中略）これは、実際は連声で発音されてもそれをローマ字の表記面には表わさない方針であったことを示すものである」（210）とする。

定される場合)も、キリシタン資料で *Bet* (別)、*Bechi* (別)、*Mitçu* (蜜) 等が現れ、開音節形、閉音節形の双方の可能性がある。また謡曲伝承音において「そこで発音を休止する場合」について、常に「含」、すなわち鼻的破裂音であることが指摘され(岩淵 1969: 189-190)、江戸期の明和改正謡本では、語末は鼻的破裂音となる(坂本 2022: 37)が、さらに古い資料性をもつと考えられる声明では、語末環境に鼻的破裂音は現れず、気流の断止、すなわち閉音節を指示する注記が見られる(浅田 2007: 39-40)。

このようにこれまでの研究によると、無声子音前以外の舌内入声音は、資料ごと、環境ごとにさまざまな報告があるが、禅竹伝書の用例を環境ごとに整理すると表 8 の通りである(「無譜 or 一体型」、無声子音前の唇内入声は出現しなかったため、省略する。また比較のために、和語の促音の例を加える。同じ表記様式で独立型と一体型がどちらも現れない場合は比較が不可能なため「—」とした)。

表に示すように、残念ながらそれぞれ例が十分に収集できず、特に語末、母音、ラ行子音の前に位置する舌内入声字は禅竹伝書には現れなかったため、実態は不明とせざるを得ない。

表 8 禅竹伝書における入声韻尾への節付

種類	後続環境	分離表記		融合表記	
		独立型	一体型	独立型	一体型
舌内入声	無声子音 (カ・サ・タ・ハ/パ行)	0	3	1	8
	ガ・ザ・ダ・バ行、ナ・マ行	2	1	3	4
	母音 (ア・ヤ・ワ行)	—		—	
	ラ行	—		—	
	語末	—		—	
喉内入声	カ行	—		1	0
	カ行以外	9	0	8	3
和語の促音		1	2	—	

またその他の環境も例が少なく明確な傾向を掴みづらいが、分離表記、融合表記それぞれのなかで、節付の様式の多寡を大まかに捉えると、次のように整理できる。独立型の占める割合の大きい順に挙げる。

分離表記：

カ行以外の喉内入声>ガ・ザ・ダ・バ・ナ・マ行前の舌内入声
= or >和語の促音>無声子音前の舌内入声

融合表記：

カ行前の喉内入声>カ行以外の喉内入声
>ガ・ザ・ダ・バ・ナ・マ行前の舌内入声>無声子音前の舌内入声

ここで注目したいのは、分離表記でも融合表記でも促音化している可能性の高い¹⁵⁾ 無声子音前の舌内入声に、一体型の節付の割合が高いことである。また、喉内入声のうちカ行以外の子音が後接する場合は開音節化して *ki*, *ku* で実現していると予想されるが、分離表記・融合表記とも独立型の割合が高い。すなわち、促音化している場合は一体型で節付される例が多く、開音節化している場合は独立型で節付される例が多いことが確認される。ただし、融合表記におけるカ行前の喉内入声の1例については、促音化環境にあるが独立型で節付されており、例外となっている。この「落花(らつくわ)は」の例については、和語の促音にも3例中1例の独立型(さつて(去))が見られるのと同様に、

¹⁵⁾ キリシタン資料(『天草版伊曾保物語』)では無声子音前でもまれに開音節形が現れることが報告され(柳田 1993: 421-426)、日葡辞書を探すと、*Fachifraqi* (鉢開き)、*Fachitaraq* (鉢叩き)、*Ichicat* (一喝)、*Ichicoeu* (一石)、*Ichifat* (一鉢・一髪・一八)、*Ichifot* (一忽)、*Ichiquan* (一卷・二管)、*xichi fachiqi* (七八騎)、*xichifiacu* (七百)、*lūxichiqini* (十七騎に)、*Xichifa* (七八)、*Xichixe* (七世) が拾える。森田 1993 は開音節形と閉音節形の両条を掲出する例を検討する中で、「要するに、開音節化形～ちは、語によって固定しており、それと～t形と両方ある語は、大勢に従って～t形の方をより多く用いるに至ったものが少なくなかった」(202) とする。また佐々木 1995 も親鸞所用の入声点に見られる「急」「緩」を材料として、「一・七・八・日」への「緩」加点からこれらが開音節化して発音されていたことを指摘した(27-29)。これらは無声子音前でも開音節形で実現することがあり、挙例されているなかでも「一^(入緩)卷」等が見られる。さらに坂水 2020 は、通常開音節化していたと考えられる漢語形態素として「一」「七」「八」を取り上げ、室町時代の経書についてその実態を探っている。このように語形として開音節化した(/CVT/ > /CV.ti/) 場合については、無声子音前でも促音化が起こらない可能性はあるものの、先に示したように、禅竹伝書ではこれらの形態素も「八百(はつびやく)〔三曲5ウ〕」を除いて一体型であり、促音化していると考えれば矛盾はなく、無声子音の前での開音節化を積極的に支持する証拠はない。ただし漢字音の和化の問題として、開音節化の無声子音前環境への浸食については、さらに考える必要があろう。福永 1963 も浄土真宗伝承音の舌内入声について、「時にはこれらの促音化すべきはずの子音が後接しても、促音化せず〔—tʃi〕の音を保ったまま、結びつくことさえあるものに「一・七・八・日・吉・越」の文字がある」(151) としたうえで「七千万」「七ヶ国」「七ヶ月」「七昼夜」「七八ヶ年」「八ヶ条」「八ヶ年」を挙げるが、より典型的な漢語の型である二字熟語の前面に舌内入声音が位置する例は挙げられていない。

用例が少ないことによってたまたま独立型で現れた例外と見ておく。

以上の音価と節付の関係は、前稿において指摘した、一イ・一ウ・一エ・一オ・一アにおいて、形態素境界をまたがないものの方がまたぐものよりも一体型の割合が高いこと、また一ウのほうが一イ・一エ・一オ・一アよりも一体型の割合が高いことと傾向を一にする。すなわち、特殊モーラの後部要素（促音、二重母音の後部要素）は独立性が低いため一体型が選ばれやすく、独立した音節（開音節化した入声音、母音接続の後部要素）は独立性が高いため、独立型が選ばれやすいということになる。この点で、禪竹伝書の節付の有り様は、従来から指摘されてきた後続音による分布を矛盾なく説明できる。すなわち、開音節化している場合は独立したゴマ点が付されやすく、促音化している場合はピッチを与えうる母音や有声音がないため、ゴマ点が付されにくいと考えられる。

さて、問題となるガ・ザ・ダ・バ・ナ・マ行前の舌内入声については、用例が十分でないこともあり、その位置づけが難しい。特に分離表記については、独2/体1について、無声子音前の独0/体3との間の差、和語の促音の独1/体2との間の差は明確でない。一方で融合表記においては独3/体4であり、無声子音前（独1/体8）、カ行以外の子音前の喉内入声（独8/体3）との差は比較的確で、無声子音前の舌内入声が一体型優位、カ行以外の子音前の喉内入声が独立型優位であるのに対して、両者の中間に位置しているとみることができる。ここでは用例の多い融合表記を重視し、ガ・ザ・ダ・バ・ナ・マ行前の舌内入声を、開音節化して独立的な喉内入声と、促音化して非独立的な舌内入声の中間に位置づけておく。

ガ・ザ・ダ・バ・ナ・マ行前の舌内入声への節付に関して独立型と一体型が拮抗しており、開音節化した喉内入声と促音化した舌内入声の中間に位置するとすれば、その音価はどのように考えればよいだろうか。一体型と独立型が拮抗しているという分布傾向を考えると、有声子音前の舌内入声は促音化も、開音節化もせず実現している可能性が高い。可能性としては、無声母音付加形 [-t̚i, -t̚u]（肥爪2019：406）か、鼻的破裂音 [t̚] が考えられる。決め手はないが、世阿弥の時点でも鼻的破裂音が認められる⁽¹⁶⁾ ことを重視すれば、促音と同様

¹⁶ 世阿弥自筆能本に見られる小書きのなかに、鼻的破裂音を示したと推定されるものが指摘されている（岩淵1934：219-222、岩淵1969：160、坂本2002：16）

の独立性を示す可能性が高い寄生母音添加形でなく、ピッチを与えやすい共鳴性をもつ、鼻的破裂音で実現していた可能性が高いと判断する。

また語末環境の舌内入声については、先に触れたように、謡曲では鼻的破裂音、声明では閉音節形の可能性がある。禅竹伝書においては語末環境（正確には文節末環境）の舌内入声として2例が現れるが、残念ながらその音節全体にゴマ点が施されていない。よって禅竹時代の謡の語末舌内入声の実現については、不明とせざるを得ないが、今のところ環境による舌内入声の実現形の差について、通時的な観点から次のような見通しを持っている。

まず、この鼻的破裂音については、すでに橋本 1928 が後続音による実現形の違いが「音の同化によって」（263）生じると解しており、このように鼻的破裂音を逆行同化と捉える見方は、歌謡のなかの特別な歌唱法でなく、一般の日本語にも存在するという考えに結びつく。たとえば遠藤 1998 は鼻的破裂音を指すと解釈できる表記を豊富に挙げ、「十六世紀半ば頃まで明確に存在していた」（15）と考えると同時に、キリシタン資料や仮名表記に反映していないのは、独立して音節を形成せず、促音（入声音）の枠の中に組み込まれた音的存在にすぎなかったからであると説明する。ここでは「明確に存在する」のがどのような位相かという問題には立ち入っていないが、口頭言語における鼻的破裂音の存在を認める方向の論と考えられよう。また山田 2021 では、キリシタン資料における t 入声形を取り上げ、「キリシタン・ローマ字文献を中心にみる限り、t 入声形が必ずしも日常語から乖離した知識音とは想定し難い」としたうえで、鼻音が後続する環境に多く分布することを根拠に、その実現形として [t̃]（本稿で言う鼻的破裂音）を想定する（山田 2021：121）。

一方で大野 1959 は『山槐記』の即位式の条（治承四年（1180）四月二十二日）の「奏曰、礼畢、其声高長、レイヒツ、乍四字皆上声也、又乍四字其間同長サニ唱之、宇治記云、ツ字鼻ニ言入テ後音平声也」という注記により、語末の「ツ」に現れる鼻的破裂音に言及しており、それを「特殊な、いはば学者的発音であつた」（24）とする。また岩淵 1969 は契沖の『和字正濫通妨抄』（元禄十年（1697）稿）を引き¹⁷、「もし、この記載が、仮に一般の言葉についてであるということになると、一般の言葉で鼻的破裂音があったということを確認

¹⁷ 「つめ字ありてかきくけこの濁音につく時、鼻に入れていふ。さらねは屈は沓のこつく聞ゆるやうに、葛は勝、吉は狐と聞ゆるやうにいふ。さしすせそ同。たちつてと同。なにぬねの同、はひふへほ同、まみむめも同、らりるれる同。」

めなければならない」(160)とする一方で、ロドリゲスの『日本文典』の記載に鼻的破裂音を思わせる説明がないことを理由に「一般の口語に鼻的破裂音があったとも言えないようである」(160)とし、両論を併記する。さらに柳田 1993 は、謡におけるノム（鼻的破裂音）について「入声音 *t* が減じた後、これを特殊な音として発音することを伝承するために生まれたものなのではないか」(435)とし、犬飼 2012 も「謡曲や平曲では *t* 入声を内破の発声で保存し、これを「のむ」と称していた」(85)と解し、口頭語と異なる語りの芸能の発声法として、*t* 入声を保存したものと見なしている。筆者もかつて浅田 2007 において、声明譜における発音注記を材料として声明における音価を検討し、この鼻的破裂音の現れる位相の問題については、「教養階級層に限って用いられたものが声明に反映され、一般の日本語へも一部波及したものの、その影響は限定的なものであり、大勢としては入声音と開音節の対立が解消する方向に進んだ」(44)と考えた。

これらから、これまでの研究では、鼻的破裂音は口頭言語にも後続条件によって異音として現れていたという解釈と、芸能等の限られた場にもみ現れる伝承音であるという解釈の、二つの解釈がなされてきたことが分かる。またこれに関連して、後続環境による分布（鼻音性をもつ濁音・ナ・マ行前に現れる一方で、鼻音性の関与しない語末については声明で現れず、謡で現れること）をどう捉えるかが問題となる。以下では柳田 1993・犬飼 2012 の説に大筋で従いながらも、これらの問題について、筆者なりの説明を試みる。

まず、現代諸方言の状況について見てみると、「音韻総覧」(上野 1989)に「きつね」のツなど、ナ行の前のツ音節が鼻的破裂音で実現するという長崎県、大分県の例が見出せ、また吉田他 2018 にも福井県方言に「寝てもた」の「て」が [netⁿnta] のように実現するという報告があるが、その出現はごく限定的であり、普遍的な言語事象とは言いがたい。濁音前の舌内入声は、開音節化した母音添加形以外では、むしろ促音化の方が一般的であり¹⁸⁾、このことは従来あまり重視されてこなかったが、重要な事実であると考ええる。また鼻的破裂音は、一部の例外¹⁹⁾を除き、当然ながら漢語に限定して起こるもので、音韻

¹⁸⁾ 濁音前の促音については注 13 を参照のこと。

¹⁹⁾ 岩淵 1934 には「初月〈ハツツキ〉」(「初」に「含」)、「千満〈センミツ〉」(「満」に「含」)、「山賤〈ヤマガツ〉」(「賤」に「含」)等の例が挙げられている(岩淵 1934: 208)が、漢語に誤認されたものがたまたま残ったものと考えられる。岩淵 1934 も「字音の入声ツの場合の類推によって生じたこと」と解している。

体系全体を覆うものではなく、語の特性によって出現が制限されている。これら鼻的破裂音の非一般性を重視し、鼻的破裂音は一般の口頭語でなく、儀式や芸能等の特殊な環境で生じた伝承音であるという見方を取りたい。ただし伝承音と解する場合は、音楽的な要請による特殊な声の技法ということであるので、言語的な環境の影響を受けにくいことが予想される。よって鼻的破裂音が口頭語には出現せず、儀式や芸能等に限る伝承音であるという立場をとる場合は、後続音による相補分布をどのように説明するかという点が問題となろう。

本稿ではこの問題について、鼻的破裂音が中古の芸能や儀式等、聴衆のある場で、聞き取りやすい明瞭な発音が望まれ、かつ外来語である漢語を中国語らしく聞かせることが要求されるという条件のもとで生じたと解する。このような場では、舌内入声音 /-T/ が日本語のツ /tu/・チ /ti/ と異なるという知識が共有されており、日本語らしい開音節が避けられる傾向が強かった。そこで、そのような志向が共有されている詠唱の場において、後続音に鼻音のある位置にある舌内入声に鼻的破裂音が選ばれることがあったと考えられる。この詠唱における実現形は、一語意識を背景として、舌内入声 /-T/ を聞こえやすく発音するという意識により、あるいは /-T/ を一定の時間引き延ばすという要請により、聞こえが小さく持続が不可能な [-ʔ], [-t], [-tu] が避けられ、濁音（前鼻音を有するガ・ザ・ダ・バ行）・ナ・マ行の前で鼻的破裂音として実現したものと捉えられる。

鼻的破裂音の発生は、このように母音添加を避ける圧力が強い仏典の誦読、声明の詠唱、儀礼での詠唱の場において、鼻音に前接する舌内入声が発音化と同様に逆行同化を受けて現れたことに端を発すると考えられる。その音声特徴として閉音節性と共鳴性を有しており、共鳴性は詠唱に都合がよく、閉音節性は非日本語的な、外来音らしい印象を与えるものであった。そのことから次第に外来音らしい誦読法、あるいは日常とは異なる伝統的な誦読法としての価値を持つようになり、様式化された結果、声の技巧としての性格が加わったものと考えられる。こうした様式化・技巧化を経た結果、『山槐記』の「レイヒツ」の例や、謡曲・平曲のように、鼻音性の関与しない語末やラ行子音前などにも鼻的破裂音が現れる場合があったと推定される。

このように、特定の儀礼・芸能の場において語末環境の単独形として非母音添加形に替わって鼻的破裂音が定着すると、さらには後続音を鼻音化する力も持つようになる。坂本 2022 で例に挙げられている江戸期謡本における「念佛^{ネブツ}

を（「佛」字に「含」の注記）」(37) (図3)⁽²⁰⁾ のような舌内入声の撥音系連声例は、謡等の芸能の場における /-T/ と /-tu/ の区別において、閉音節（非母音添加形）／開音節（母音添加形）の対立が維持できず、/-T/ の実現として非母音添加形にかわって鼻的破裂音が代替され、鼻的破裂音形／母音添加形の対立にずらして解釈された結果であると考えられよう⁽²¹⁾。

ただし、このような対立は特定の儀礼や芸能の場に限定されて適用されていたものと考えられる。漢文直読～漢文訓読の詠唱の場において求められた、聴衆の存在を背景にした明瞭な可聴性の高い発音の要請と、入声音を日本語のツ・チと区別し開音節を避ける志向という2つの条件のもとに、後続鼻音の同化作用によって生じた鼻的破裂音は、その勢力を語末に広げ、伝承されることになったが、一方で明瞭な発音が要請されず、開音節を避ける志向もない口頭語の世界では、語末はもちろん濁音前においても鼻的破裂音を經由せず、直接現代語のような開音節形に置き換わっていったと考えられる⁽²²⁾。

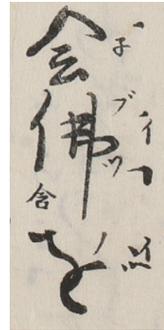


図3 明和改正謄本

²⁰ 神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ (<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100405351>, 38コマ目) より転載。

²¹ 以上の解釈は、「入声音 t が減びた後、これを特殊な音として発音することを伝承」(柳田 1993 : 435)、「t 入声を内破の発声で保存」(犬飼 2012 : 85) と同様の考え方である。

²² 山田 2021 は鼻的破裂音の衰退を、前鼻音の衰退と結びつけて論じている (山田 2021 : 121, 注 1)。しかしもし濁音の鼻音性と鼻的破裂音が連動していたなら、濁音の各行による鼻音性の喪失の時期が異なることにより、たとえば鼻的破裂音の分布もガ行前のみ最後まで維持し、他の行は開音節化しているという状態などが想定されるが、今のところそのような徴候が見て取れる資料・伝承音は存在しない。またナ行・マ行の前は、前鼻音衰退後も鼻的破裂音が出現する環境にあるが、ナ・マ行の前のみ鼻的破裂音が出現するような伝承音や資料は遺存しない。よって前鼻音の衰退と鼻的破裂音の衰退は直接には関係せず、独立的な事象として捉えることが妥当ではないかと思われる。

鼻的破裂音のような中国語で見られない音声的特徴が日本漢字音の誦読に生じたのは、もっぱら日本側の事情によるものであって、中古に言語外的な要因（聴衆を前提とした可読性の高い発音の要請、開音節を避けるという外国語に関する知識の共有）の条件のもとで言語内的な要因（後続音による逆行同化）が働いたことによる。こう考えると、語末の鼻的破裂音はもとより、語中の鼻的破裂音でさえも、開音節化が強く制限される場において生じた異音が、儀式・芸能の世界で様式化したものであって伝承音・知識音としての性格が強いものと解される。よって鼻的破裂音は、衰退したというよりも、一般の口頭言語には芸能・儀礼の場で使用されたものの影響で現れることがあったが、もともと部分的な使用に留まったと考えた方が穏当であろう。

5.4 拗音

最後に、拗音について分離表記、融合表記の順に実例を挙げながら見ていく。

〈分離表記〉

○独立型：用例なし。

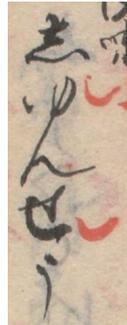
○一体型



さいしょ (最初) の [三曲 24 ウ]



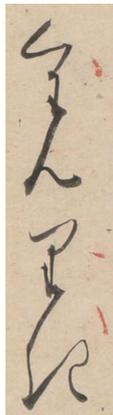
せいきやう (清香) [三曲 11 オ]



しゅんせう (春宵) [三曲 11 オ]



くわら (果羅) の [三曲 24 ウ]



ぐわんりき (願力) [次第 4 ウ]

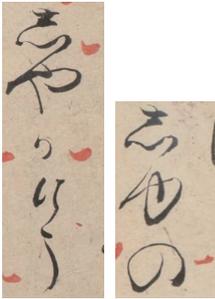


ぐわんりき (願力) [三曲 20 オ]

開拗音：そうきやう（崇教）せざらむ〔次第 6 ウ〕、せいきやう（清香）〔三曲 11 オ〕、きやうき（狂気）に〔三曲 18 オ〕、一しやう（生）は〔次第 4 オ〕、きんしやう（琴上）に〔三曲 16 オ〕、しやうじぢやうや（生死長夜）の〔三曲 22 オ〕、しやう（生）をも〔三曲 24 ウ〕、むじやう（無常）の〔三曲 21 ウ〕、ぐんしゆ（群集）も〔次第 2 オ〕、しゆんせう（春宵）〔三曲 11 オ〕、さいしよ（最初）の〔三曲 24 ウ〕、すいちやうこうけい（翠帳紅閨）に〔三曲 16 オ〕、ちやう（帳）の〔次第 4 ウ・三曲 19 ウ〕、ぢやうあん（長安）〔三曲 21 オ〕、しやうじぢやうや（生死長夜）の〔三曲 22 オ〕、はんぢよ（班女）が〔三曲 17 ウ〕、しんによ（真如）の〔次第 7 ウ〕

合拗音：くわら（果羅）の〔三曲 24 ウ〕、ぐわんりき（願力）〔次第 4 ウ・三曲 19 ウ〕、ぐわんりき（願力）の〔次第 4 ウ・三曲 20 オ〕、御せいぐわん（誓願）〔三曲 11 ウ〕

○無譜 or 一体型



しやかけうしゆ（釈迦教主）の〔次第 6 ウ〕（行をまたいだ例）

開拗音：うんしやう（雲上）の〔三曲 21 オ〕、しやかけうしゆ（釈迦教主）の〔次第 6 ウ〕、きうくわちやう（九花帳）の〔三曲 21 オ〕

合拗音：きうくわちやう（九花帳）の〔三曲 21 オ〕、くわらく（花洛）の〔次第 7 ウ〕

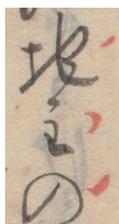
「さいしよの」の「よ」のように、拗音要素を示す仮名にゴマ点が付されていない場合、一体型と判断する。また「しゆんせう（春宵）」のように、「ゆ」の右傍にゴマ点が付されているが、拗音「しゆ」全体あるいは音節「しゆん」全体への施譜と見做される場合には、一体型として処理した。

以上のように、分離表記（仮名表記）において拗音モーラには、拗音表記（「や」「ゆ」「よ」「わ」「は」）に独立したゴマ点が節付されることがない点が確認できた。

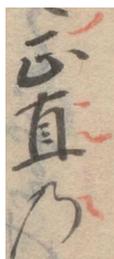
〈融合表記〉

○独立型：用例なし。

○一体型



地主（しゆ）の〔三曲 11 オ〕



正（しやう）直の〔三曲 3 ウ〕



玉（ぎよく）殿の〔次第 1 ウ〕



雪月花（せつげつくわ）〔三曲 12 オ〕



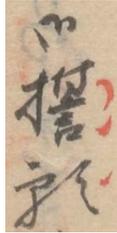
月（ぐわち）神〔三曲 5 オ〕

開拗音：一行（いちぎやう）の〔三曲 24 ウ〕、行教和尚（ぎやうけうくわしやう）の〔三曲 4 オ〕、玉殿（ぎよくでん）の〔次第 1 ウ・三曲 3 オ〕、玉殿（ぎよくでん）に〔三曲 21 オ〕、一生（いつしやう）は〔三曲 19 ウ〕、行教和尚（ぎやうけうくわしやう）の〔三曲 4 オ〕、御出生（ごしゆつしやう）〔三曲 5 ウ〕、正直（しやうぢき）の〔三曲 3 ウ〕、御出生（ごしゆつしやう）〔三曲 5 ウ〕、

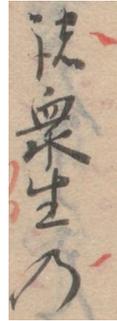
地主権現（ぢしゆごんげん）の〔三曲 11 ウ〕、地主（ぢしゆ）の〔三曲 11 オ〕、名所（めいしよ）は〔三曲 6 オ〕、不定（ふぢやう）の〔三曲 22 オ〕、重山（ちようざん）に〔三曲 16 オ〕、六千八百餘歳（ろくせんはつびやくよさい）なり〔三曲 5 ウ〕、光明（くわうみやう）〔三曲 24 ウ〕

合拗音：行教和尚（ぎやうけうくわしやう）の〔三曲 4 オ〕、光明（くわうみやう）〔三曲 24 ウ〕、雪月花（せつげつくわ）の〔三曲 12 オ〕、榮花（えいぐわ）は〔三曲 19 ウ〕、月神（ぐわちじん）〔三曲 5 オ〕

○無譜 or 一体型



御誓願（ぐわん）〔三曲 4 オ〕



諸（しよ）衆生の〔三曲 4 オ〕

開拗音：諸衆生（しよしゆじやう）の〔三曲 4 オ〕

合拗音：和光（わくわう）の〔三曲 7 オ〕、御誓願（ごせいぐわん）〔三曲 4 オ〕

以上禅竹伝書における拗音への節付を見た。開拗音と合拗音に分けて分布を確認すると次表のようになる。

表 9 禅竹伝書における拗音の節付（開拗音／合拗音）

		独立型	一体型	無譜 or 一体型	計
分離表記	開拗音	0	18	3	21
	合拗音	0	6	2	8
融合表記	開拗音	0	17	1	18
	合拗音	0	5	2	7
総計		0	46	8	54

禅竹伝書においては他の特殊モーラと異なり、開拗音も合拗音も独立的に節付されておらず、無譜 or 一体型を除けばすべて一体型である。開拗音と合拗音は、双方とも一体的に把握されており、分節意識としての独立性は低いと判断される。また同時に、分離表記でも融合表記でも、節付のうえで開拗音と合拗音に差が無いことも確認できた。

このことから、当時の謡の音声面において、たとえば [ki.ja] [ku.wa] などと分割して発音されず、一体的に [kja] として発音されていたこと、また禅竹は一部の後世の譜のように仮名「や」「ゆ」「よ」「わ」「は」に対して独立したゴマ点を与えず、謡の音声面を重視した節付を行っていることが示唆される。

6. 禅竹伝書における特殊モーラの序列

以上禅竹伝書の重音節の後部要素について、独立したゴマ点が付けられるかどうかを確認した。一体型の占める割合（一体型例数 / (独立型例数 + 一体型例数) × 100。「一体型 or 無譜」は除いて算出）をまとめると次図のようになる。ここで二重母音は長音化している可能性が高い㊦ウ、㊧ウ、㊨ウ、㊩ウ、㊪イ、長音化していない可能性が高い㊫ウ、伝承音の可能性が高い㊬ウの3種に分けた²³。また、拗音は合拗音と開拗音に差がないため、両者をひとまとめにした。なお、例が5例以下しかみられず、その相対的な位置関係について信頼性が低いと判断される種類の特殊モーラは破線枠により示した。

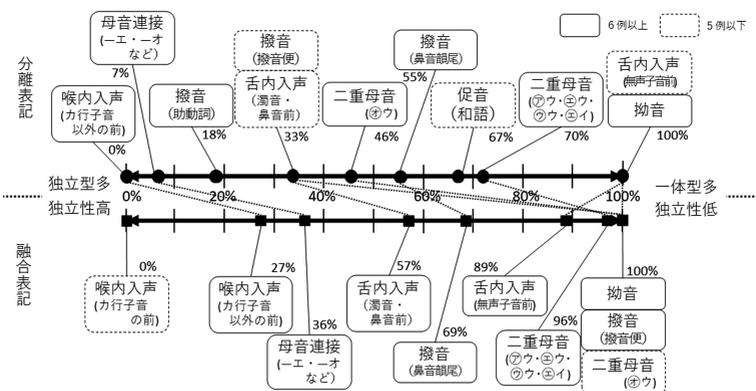


図4 禅竹伝書における独立型に対する一体型の占有率

²³ これら二重母音に関する詳しい議論は浅田 2023 に譲り、ここではその帰結を利用する。

まず分離表記と融合表記の違いについて見ておくと、同じ特殊モーラ同士では、たいていの特殊モーラにおいて分離表記（上段）よりも融合表記（下段）の方が図において右側にずれて位置しており（図において上段と下段で同種の特殊モーラを結ぶ破線が右肩下がりになっており）、全体として融合表記の方が一体型の占める割合が高くなることが確認できる（例外は「舌内入声（無声子音前）」のみ）。これは先に予想した通り、節付の初期条件として与えられる詞章の表記において、特殊モーラ類が仮名表記として単独で切りだされている分離表記と、それが漢字に埋もれた形で表記上頭在化していない融合表記の間で、節付の仕方に差が生じることによると解釈できよう。

一方で、同表記のなかでの序列をみると、分離表記での序列と融合表記での序列はほぼ一致していることが知られる。このような観点から上の特殊モーラについて分類すると、次の三種に分けることができる。

ア) 分離表記と融合表記で序列が共通のもの：

喉内入声（カ行子音以外の前）、母音連接（一エ・一オなど）、舌内入声（濁音・鼻音前）、撥音（鼻音韻尾）、二重母音（㊦ウ・㊧ウ・㊨ウ・㊩イ）、拗音

イ) 分離表記と融合表記で序列が異なるもの：

撥音（撥音便）、二重母音（㊫ウ）、舌内入声（無声子音前）

ウ) 片方にしか現れないもの：

分離表記のみ：撥音（助動詞）、促音（和語）

融合表記のみ：喉内入声（カ行子音の前）

図5では、特殊モーラ同士の相対的關係について、「ア）分離表記と融合表記で共通するもの」を中段に示した。次に「イ）分離表記と融合表記で序列が異なるもの」（例えば、二重母音㊫イは分離表記では舌内入声（濁音・鼻音前）と撥音（鼻音韻尾）の中間に位置するのに対して、融合表記ではもっとも独立性が低い位置にある）については、「ア）共通するもの」との相対的位置によって、分離表記は上段に、融合表記は下段に配置した。最後に「ウ）片方にしか現れないもの」も、同様に「ア）共通するもの」を基準に上段もしくは下段に配置した。

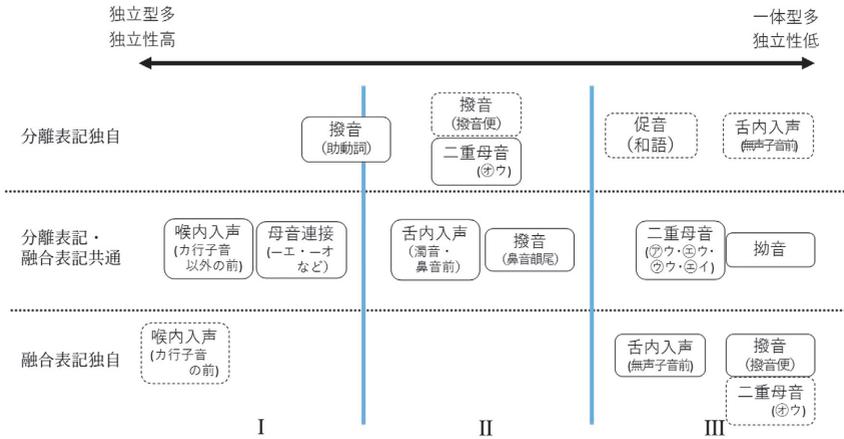


図5 独立性に関する特殊モーラ間の相対的關係

ここから、禅竹伝書における節付の独立性については、分離表記と融合表記双方で共通に認められる序列が見出せる（図中段）。すなわち、独立型の多いものから挙げると、カ行子音以外が後接する喉内入声、母音連接（一エ・一オ・㊦イ・㊦イ・㊦イ・㊦イ）、濁音・鼻音が後接する舌内入声、漢語の鼻音韻尾、二重母音（㊦ウ・㊦ウ・㊦ウ・㊦イ）、拗音となる。これらは大まかにみると、独立性の高いⅠ、中程度のⅡ、独立性の低いⅢの三群として捉えられる²⁴。

次に「イ」分離表記と融合表記で序列が異なるもの」および「ウ」片方にしか現れないもの」について、それぞれの独立性を検討し、三群のいずれに位置するかを考察する。

まずイ)について、和語の撥音便については、分離表記ではⅡ（「さかん（盛）」2例が独立型、「せんかた」1例が一体型）、融合表記ではⅢ（「御（おん）」6例一体型）となっているが、このうち融合表記「御」の節付については、先に5.2で述べたように特殊モーラの独立性が反映されたものでなく、禅竹がこの語に対する表記、節付を意識的に固定していたと解釈する。よって撥音便の独立性は、例は少ないが分離表記の方を重視し、Ⅱに属すると解釈する。

また二重母音（㊦ウ）については、分離表記ではⅡ（独14/体12）、融合表

²⁴ 図4で示した一体型の占有率でいえば、おおむね分離表記では20%、60%が、融合表記では50%、80%が境界となる。

記ではⅢ（独0/体3）に属する。こちらは例数から分離表記の位置づけの方が信頼できると考え、Ⅱに属すると見なしたい。

最後に無声子音が後接する舌内入声については、分離表記も融合表記もⅢに属する（分離表記＝独0/体3、融合表記＝独1/体8）が、融合表記の方がやや一体型の割合が大きいため、分離表記と融合表記で相対的な位置づけが少し異なる。しかしここでは大きな差がないとみて、Ⅲとして扱う。

次にウ)について、融合表記にしか現れないものとしてカ行子音が後接する喉内入声があるが、1例のみが独立型で出現している。これは先も述べたように、促音化しているはずであるが、たまたま独立型で現れたものとし、ここでは検討から除外し、解釈を保留する。

また分離表記にしか現れないものとして和語の促音便であるが、Ⅱに寄ったⅢに位置している（独1/体2）。例は少ないが、同様に促音化していると見られる無声子音が後接する舌内入声と同じグループであり、その点で矛盾無く説明できるので、Ⅲとして扱う。

最後に同じく分離表記にしか現れない助動詞類に含まれる撥音について検討する。分離表記のなかで母音接続と濁音・鼻音前に位置する舌内入声の間に位置し、ⅠとⅡの間にある（独18/体4）。Ⅱとした鼻音韻尾（独25/体30）との差は明確であるので、Ⅰとしておく²⁵。

以上の検討の結果、節付の様式から特殊モーラ・拗音に次の3つのグループを認めることになる。

- Ⅰ（独立性高）：喉内入声（カ行子音以外の前）、母音接続（一エ・一オ・㊦イ・㊧イ・ウイ・㊨イ）の後部要素、撥音（助動詞類に含まれる「む」）
- Ⅱ（独立性中）：舌内入声（濁音・鼻音前）、撥音（鼻音韻尾）、撥音（撥音便）、二重母音（㊩ウ）の後部要素
- Ⅲ（独立性低）：二重母音（㊦ウ・㊧ウ・㊨ウ・㊩イ）の後部要素、促音（和語）、舌内入声（無声子音前）、拗音

※喉内入声（カ行子音前）、舌内入声（語末・ラ行子音前）は不明。

²⁵ 助動詞類をもう少し細かくみると、形態素境界をまたぐ助動詞「む」の例（「いはんや」「きえんとす」「ながらへん」等）は独10/体1、形態素境界をまたがない助動詞「らむ」「けむ」の例（「しらすらん」「いとひけん」等）は独8/体3であり、わずかに「らむ」「けむ」の方が一体型の割合が高く、ここから両者が独立性のうえで区別されている可能性もある。しかしながら、頻度のうえで明確な差でないと判断し、一括して捉えることとした。

これら3つのグループについて、特殊モーラの独立性という観点から特徴を述べる。

まずⅠはほぼ独立型によって節付されるグループであり、それぞれ独立性が高い。節付上非特殊モーラとの間に差を認めがたいため、15世紀には前のモーラと結合した重音節を構成しておらず、独立性の観点からは特殊モーラの域外にあった解される。すなわち、それぞれが1音節を構成しており、開音節化したカ行子音が後接する喉内入声 /ki/ku/、母音接続の後部要素の /e/, /o/, /i/、助動詞に含まれる /mu/ が、それぞれ [ki][ku]、[je][wo][i]、[mu]~[m]~[ū] で実現していたと推定する。

次にⅡであるが、これらは一体型の比率のうえでⅠとⅢの中間に位置するグループであり、Ⅰよりも一体型が現れやすいが、Ⅲよりは現れにくい。よってその独立性は中程度と認められる。これらは、非特殊モーラとの間に独立性の差が認められることを重視し、特殊モーラとして扱うのが妥当であると判断する。それぞれ単独で1音節を構成しておらず、前のモーラとひとまとまりで重音節を構成しているとみなされる。すなわち、舌内入声 /-T/、鼻音韻尾 /-N/、二重母音㊤ウ /oW/ が、それぞれ [-r̥] (逆行同化)、[m]~[n]~[ŋ] (逆行同化)、[ou]~[o:] として実現していたと推定する。

最後にⅢは、多くが一体型によって節付されるグループで、独立性が低い。特殊モーラであり、単独で音節を構成せず、前のモーラとともに重音節を構成しているのはⅡと同様である。ただⅡよりも独立性が低いという結果が観察され、重音節がモーラに分割されにくい性質を持つ。前稿では、二重母音 /aW/, /eW/, /uW/, /eJ/ は恐らく長音化して [ɔ:]~[o:], [jo:], [u:], [e:] として主に実現しており、その結果、独立性が低くなると解釈した。また和語の促音便 /-Q/ と無声子音が後接する舌内入声 /-T/ については、現代語と同様に音声実現上は閉鎖待機音となっていると考えられるが、禅竹伝書ではこの場合も促音に対して単独でゴマ点が与えられない傾向が強く、直前のモーラと一体的に節付が行われる。

よって、禅竹伝書においては、おおむね次のような序列が認められることになる。

表 10 禅竹伝書の節付から見た 15 世紀のモーラの独立性の序列

非特殊モーラ		特殊モーラ	
I 独立性高		II 独立性中	III 独立性低
▶ ア・イ (㊦イのイを除く)・エ・オ ▶ カ・キ・ク・サ・タ・ナ… (開音節化した喉内入声はキ・クに、助動詞はムに含まれる)	>	▶ 撥音 (撥音便、鼻音韻尾) ▶ 鼻的破裂音 ▶ ㊦ウ (二重母音の後部要素)	▶ 促音 ▶ ㊦ウ・㊦ウ・㊦ウ・㊦イ (二重母音の後部要素が長音で実現)

この点に関連して、現代の歌謡の楽譜付与によって特殊モーラを観察した一連の研究 (氏平 1996、窪菌 1999、田中 2000・2008、平田 2019) では、特殊モーラ類のなかに序列・階層を認めており、田中 2008 は 2 つの基準を設定して、序列が生じる原理を説明した⁽²⁶⁾。

特殊モーラの階層に関する 2 基準 (田中 2008 : 69)

([+son] は共鳴音を、[-son] は阻害音を表す)

a. ソノリティー :

二重母音第 2 要素 /J/、長音 /R/ >> 撥音 /N/ >> 促音 /Q/
 V >> C[+son] >> C[-son]

b. 安定性 : 二重母音第 2 要素 /J/、撥音 /N/ >> 長音 /R/、促音 /Q/
 (独自の音色) + >> -

禅竹伝書におけるゴマ点の配当は、上の 2 基準のうち b に一致しており、安定性、すなわち独自の音色を持っているかどうか、節付の様式に大きく影響していると考えられる。

浅田 2004 では、声明の節博士譜を対象に、漢字音における特殊モーラについて調査し、閉鎖音系<鼻音系<母音系の順で独立性が大きくなるという結論を得た。その際、母音系韻尾については、ei, ai, ui, iu, eu, au, eu, uu の 8 種について、明示的な差がないことが確認されている (浅田 2004 : 40)。すなわち、

²⁶ これまでの音符付与に関する研究では、特殊モーラの自立性に関して、促音がもっとも低く、二重母音の第 2 要素がもっとも高いという傾向がおおむね共通しており、長音と撥音の位置が諸研究によって変動する。田中 2008 は、この序列の違いを、2 つの基準を設定することによって説明しようとする。

母音連続の独立性については、声明において差がないのに対し、謡曲では明確に分かれていることになる。この違いについてはいくつかの解釈が可能だが、時代差による長音化の進行の違い、位相差（漢文直読と和文・訓読文体）による違いが関与している可能性を指摘しておくに留めたい。さらに、声明の母音系韻尾が長音化していないものとするれば、aのソノリティーによる基準が当てはまっており、bで解釈される禅竹伝書の記譜法とは、異なる基準による反映である可能性がある。

また拗音については、音節構造上の位置が異なるので、特殊モーラとは別に扱う必要があるが、禅竹伝書では開拗音、合拗音ともに分割されて節付されている例は見られず、すべて一体型で節付されていた。肥爪 2019・2023 では、漢字音移入の当初の表記の違いを解釈して、開拗音は2単位的に、合拗音は1単位的に受け入れられ、その後室町時代ごろに1単位化（1モーラ化）したとされる（肥爪 2019：161-168・同 2023：8-9）。これは主に表記を材料とした考察であるので、節付に反映された分節意識を検討する本稿の観点とは異なるのであるが、拗音に対する「1単位的」「2単位的」という捉え方は、恐らく節付でも検証可能な音節構造上の位置づけであることが予想される。そこでこの観点から拗音に対する節付を解釈すれば、分節意識上も、15世紀には、すでに開拗音も分割しがたい「1単位的」な状態になっていたと考えられる。ただし拗音への節付については、時代が降った謡本では流派によって独立型の節付を原則とすることがあることが報告されている（金春 2004、松居 2011・2012）。この拗音への節付については、室町時代の謡本の全体を視野に入れ、別に考察する必要があると思われ、現在別稿を準備している。

まとめ

本稿では、前稿で取り上げた禅竹伝書における二重母音に加え、撥音、促音・入声音、拗音を対象とし、その節付の様式を観察した。その結果、禅竹伝書と15世紀中頃の中世語の音韻的・音声の特徴について、次のことが確認された。

- ・禅竹伝書において、独立型で節付されるか、一体型で節付されるかは、詞章の表記（融合表記か分離表記か）と特殊モーラに対する韻律上の分節意識（独立的か非独立的か）が影響を与えていると判断される。

- ・ 禅竹伝書の詞章の表記について、どの特殊モーラにおいても、漢字で表記された融合表記よりも、仮名で表記された分離表記の方が独立型の節付の割合が高い。
- ・ 禅竹伝書に反映される15世紀中世語の分節意識の独立性について、特殊モーラのなかでは、撥音（撥音便、助動詞、鼻音韻尾）・鼻的破裂音・㊦ウ（二重母音の後部要素）の独立性が高く、促音、二重母音が長音化している可能性が強い㊧ウ・㊨ウ・㊩ウ・㊪イの独立性が低い。
- ・ 拗音は開拗音・合拗音ともにすべて一体型で節付されており、分節意識としては非独立的である。
- ・ 舌内入声のうち濁音・ナ行・マ行の前に位置するものは、節付に関して促音化環境にあるものと開音節化していると考えられるものの中間的な性格を有していることから、鼻的破裂音として実現していると考えられる。
- ・ 鼻的破裂音が一般の口頭言語にあったものか、儀式・芸能に限定的な伝承音であったのかという議論については、現代諸方言にあまり見られないこと、謡では語末にも規則的に現れそれらは同化とみなせないことを重視し、伝承音である可能性が高いと判断する。
- ・ 伝承音としての鼻的破裂音の発達の経緯について、中古における舌内入声の実現に際して、聞き取りやすい明瞭な発音が望まれ、かつ日本語らしい開音節が避けられる詠唱の場において、前に鼻音性のある環境で異音として発生し、それが儀式・芸能の場で外来語らしい、伝統性を持つ伝承音として様式化した結果、勢力を語末まで拡大し、非母音添加形の代替として使用されたと考えた。

参考文献

- 浅田健太郎（2004）「漢字音における後位モーラの独立性について—仏教声楽譜から見た日本語の音節構造の推移—」『音声研究』8(2)、35-45
- 浅田健太郎（2007）「声明譜から見た入声音の音価」『国文学攷』192・193、35-45
- 浅田健太郎（2023）「金春禅竹伝書の節付からみた室町期の母音連続」『訓点語と訓点資料』151、138-91
- 犬飼隆（2012）「天草版平家物語と平家正節のt入声」『説林』60、81-90
- 岩淵悦太郎（1934）「謡曲の謡い方における入声ツについて」『国語と国文学』11(5)、98-117/11(7)、91-101/11(9)、84-95（なお引用には『国語史論集』（筑摩書房、

- 1977、185-224) を用いた)
- 岩淵悦太郎 (1969) 「口誦資料の国語史的価値」『国語学』76、88-97 (なお引用には『国語史論集』(筑摩書房、1977、150-165) を用いた)
- 氏平明 (1996) 「歌唱に見る日本語の特殊モーラ」音韻論研究会編『音韻研究理論と実践』開拓社、71-76
- 上野善道 (1989) 「音韻総覧」『日本方言辞典 下巻』小学館、左 1-77
- 遠藤邦基 (1998) 「促音・入声音の『ンツ (ンチ)』表記—二字で表記することの意味—」『国語国文』67(12)、1-17
- 大野透 (1959) 「入声韻尾に関する新資料」『国文学言語と芸』1(4)、23-26
- 表章 (1965) 『鴻山文庫本の研究 謡本の部』わんや書店
- 樹下文隆 (1997) 「解題」国文学研究資料館編『金春禅竹自筆能楽伝書』汲古書院、383-401
- 金春安明 (2004) 「節付から見た金春喜勝謡本や『天和元年霜月本・貞享三年霜月外組本 (六徳本)』」(能楽学会第3回大会 (2004年3月15日) 発表要旨)
- 窪菌晴夫 (1999) 「歌謡におけるモーラと音節」音声文法研究会編『文法と音声2』くろしお出版、243-262
- 小松英雄 (1956) 「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程—中世博士家訓点資料からの跡付け—」『国語学』25、67-79
- 坂水貴司 (2020) 「室町時代における経書の-t入声」『訓点語と訓点資料』144、1-19
- 坂本清恵 (2002) 「近代語の発音—謡曲伝承音との関係」『国語と国文学』79(11)、11-24
- 坂本清恵 (2015) 「金春禅竹の胡麻章—施譜法とアクセント反映度—」『論集』10、19-38
- 坂本清恵 (2020) 「室町末期謡本の胡麻章」『論集』15、1-14
- 坂本清恵 (2022) 「明和改正謡本における舌内入声音と連声の注記」『国文目白』61、32-43
- 迫野虔徳 (1987) 「中世的撥音」『国語国文』56(7)、41-52
- 佐々木勇 (1995) 「親鸞筆『阿弥陀経』『観無量詩経』の漢字音について」『比治山大学現代文化学部紀要』1、21-30.
- 田中真一 (2000) 「日本歌謡曲におけるリズムの変遷」『日本音声学会第14回全国大会予稿集』153-158
- 田中真一 (2008) 『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』くろしお出版
- 高山倫明 (1993) 「促音のあとの濁音」『島大国文』21、48-55
- 沼本克明 (1982) 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院
- 沼本克明 (1997) 『日本漢字音の歴史的研究—体系と表記をめぐって—』汲古書院
- 橋本進吉 (1928) 『文禄元年天草版吉利支丹教義の研究』東洋文庫 (なお引用には『キリシタン教義の研究 (橋本進吉博士著作集第十一冊)』(岩波書店、1961) を用いた)

- 肥爪周二 (2019) 『日本語音節構造史の研究』汲古書院
- 肥爪周二 (2023) 「平安時代の仮名表記一書き分けられない音韻を中心に」『言語研究』164、1-16
- 平田秀 (2019) 「2010年代の日本語歌謡曲における特殊モーラ—2名のシンガーソングライターの対照を通して—」『東京大学言語学論集』41、103-15
- 福永静哉 (1963) 『浄土真宗伝承音の研究』風間書房
- 松居郁子 (2011) 「下掛り謡本における大夫系節付の特徴—ゴマ点の用法を中心に」『神女大國文』22、8-23
- 松居郁子 (2012) 「下掛り謡本における大夫系節付の問題—成立時期とその背景」『神女大國文』23、8-18
- 三宅晶子 (1997) 「世阿弥時代の能本」月曜会編『世阿弥自筆能本集 校訂篇』岩波書店、1-10
- 森田武 (1993) 『日葡辞書提要』清文堂
- 柳田征司 (1993) 『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
- 山田昇平 (2021) 「キリシタン・ローマ字文献を中心にみたt入声」『訓点語と訓点資料』147、122-106
- 吉田健二・新田哲夫・市村葉子・宇都木昭 (2018) 「日本語福井方言の鼻的破裂音：持続時間パターンの特徴」『第32回日本音声学全国大会予稿集』144-149

付記 本論は、JSPS 科研費 JP22K00571, JP22H00665 の助成を受けた。